
たった今、現代医学が敗北しました

回収屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たった今、現代医学が敗北しました

【Nコード】

N7298X

【作者名】

回収屋

【あらすじ】

Wii版バイオハザードのギャグパロです。各キャラの人間性はオリジナルとは異なり、完全に崩壊しております。御読みになられる際は正装（もしくは全裸）で御読みください。より一層御楽しみいただけます。

序章

—— ラクーン市警に所属している特殊部隊・通称『S・T・A・R・S』 ——

—— ブラヴォーチームを乗せた搜索用ヘリが消息を絶つ ——

—— その事実が同市警のスポークスマンによって明らかになった ——

—— ラクーン市警の発表によると、昨夜、S・T・A・R・Sの同チームは遭難者が相次ぐアークレイ山地・ラクーンフォレストの現地調査に出動した ——

—— が、本日未明の通信を最後に……連絡が途絶えたとの事 ——

—— 同市警では何らかのトラブルに巻き込まれた可能性が高いとして、目撃者の証言を求めるとともに、今夕にもS・T・A・R・S・アルファチームを搜索に投入する方針となった ——

—— ラクーン郊外では近年、猟奇殺人事件が多発し話題になっていたが、今回の事件で一層住民の不安を招くことになった ——

—— 連絡が途絶えたS・T・A・R・S・ブラヴォーチームの搜索に赴いたクリス等隊員達は、怪犬の群れに襲われ、洋館に逃げ込む ——

———だがそこは……幾多のモンスターを生み出し、事件の原因を作った恐怖の研究所をカモフラージュするための館だった

———館に閉じ込められたS・T・A・R・S・メンバーのクリストジル達は、脱出口を求めて彷徨ううちに、事件の真相を知ることとなる……………

> i 3 4 3 7 6 — 3 9 6 1 <

本作品には暴力シーンやグロテスクな表現が含まれます。

本作品に登場する人物・団体・クリーチャー等は実在のモノとは異なります。

本作品に使用される挿絵はプライバシー保護のため加工されています。

尚、作品内容を声に出して読む事はおすすめしません。御両親が泣きます。

墜ちないヘリは、ただのヘリだ

> i 3 4 6 8 4 — 3 9 6 1 <

私の名は『アルバート・ウェスカー』。特殊部隊『S・T・A・R・S』のリーダー。実年齢よりずっと若く見えると、近所の奥様方からよく言われるナイスガイだ。チャームポイントは金髪のオールバックと、愛用の黒のサングラス。今、私は非常に困惑している。何故なら……さっきまで私達が乗っていたヘリが墜落し、目の前で派手に炎上しているからだ。運良く我々は大したケガもなく大破したヘリから脱出できたのだが、これに関しては完全に予定外だった。当初の予定としては、私がヘリに施した細工で突然の故障に見せかけ、山中に不時着させる手筈だった。が、神様のイタズラというか……悪魔の慈善事業というか……私の部下の一人、つまり、S・T・A・R・Sメンバーの一人が飛行中のヘリの中で、いきなりオートマチックを発砲しやがったのだ。放たれた9ミリ弾はコントロールパネルに命中し、ヘリは完全に制御不能。なんとか当初の目的ポイント付近には降りられたが、危うく全滅するところだった。で、今からこの事態を引き起こした張本人に発砲した理由を聴こうと思う。

「おい、ジル……」

パアアアアアアア ———— ン！

「うわおッ!？」

その人物の名を呼びながら肩に手を置いたら、振り向きざまに撃つてきやがった。私は華麗にブリッジして回避したが、一体、何のつもりだ!？

「ああ、なんだ……ウェスカーか」

その女はそう言つて辺りをしきりにキョロキョロしている。完全に落ち着きを失つたその様子から、よほどの事がヘリの中で起きたに違いない。

「冷静になれッ！　まずは銃をホルスターに戻してワケを話すんだ。どうしてヘリの中で発砲なんかした？」

私はサングラスを人差し指でクイツと直しながら、その女性隊員と向き直つた。

『ジル・バレンタイン』——23歳。血液型・B型。身長166センチ。体重HI MI TU。手先の器用さを活かし、爆発物処理のエキスパートとして活躍。米国陸軍のデルタフォースの訓練課程を経験するなど、身体能力や専門知識のレベルは高い。ただし……

「ゴキブリよッ！　ヘリの中をゴキブリが這つてたのよッ！」

「……………は？」

「あたしの視界に入つた以上、生理的にダメな生き物は全て滅するベエエエエし！」

パアアアアアアン——！

「うわおッ！？」

このアマ、まして私に向かつて撃つてきやがった。どうやら直感的にゴキブリと同列に並べられたらしい。

「さすがは中間管理職。避けるのが上手ね……ひッひッひッ、ヒヤアアア——　はッはッはッ！」

彼女はテンションが一定以上まで高ぶると、己を見失つてやたらと攻撃的になるコトが最近判明した。

「痛ううううう——ッ！　し、尻がああああ——ッ！」

すぐ近くで悲鳴が上がる。男性隊員の一人が跳び上がってなんだか痛がつている。どうやら、さっき私が避けた9ミリ弾が流れ弾となつて命中したらしい……………尻に。

「ウ、ウエスカー、大変だッ！ オレの尻が何者かに狙撃されたッ！ きつと敵国の陰謀に違いないぞッ！」

山中で野郎の尻を狙撃する敵国つてナニ？

「静かにしろ、クリス。まずは周辺に散乱した装備と物資を回収するんだ。その後、ここから北東2キロの地点にある洋館へと向かうぞッ！」

「わ、分かった。すぐに準備する！ おくく、ヒリヒリしやがるううう……」

そう言っ自分の尻の状態をなんとか鏡で見ようと、体をひねってマヌケにクネクネしている男――

『クリス・レッドフィールド』――25歳。血液型・O型。身長181センチ。体重80.5キロ。チームで？1の射撃技術を持つ実力者。元空軍パイロットで、アルファチームのヘリ操縦も務める。観察力、洞察力に優れ、実戦経験も豊富。臆する事を知らぬ精神力と、鋼の肉体を兼ね備えているが……

「げッ！ ウエスカー、マジでヤバイ！ さっきの狙撃でオレの尻が割れちゃった！」

「……………クリス、尻はみんな割れている」

「な、何だつてエエエ！？ それじゃあ、みんなも既に尻を狙撃されたってワケか！？」

――彼に悪気は無い。単に知能が他の人より極めて残念なだけなんだ。そう……彼には悪気も罪も無いのだ。

「ちよつと、ウエスカー」

「何だ、ジル？」

「ここから北東2キロに洋館があるって……どうしてそんなコトまで分かるのよ？」

しまった。私としたことが、ストーリーを進める事に気を取られて、とんだ失言をしてしまった。このままでは、この私が実はこの事件の黒幕の一人であるコトがバレてしまう。何とか騙し通さねばならない。そして、私はひらめいた。

「私のサングラスは特注だ。不可能は無い」

「なるほど。さすがだわ、ウェスカー」

自分で言うのもなんだが、今の適当過ぎる切り返して納得すんなよ。この女、クリスに負けず劣らずのバカかもしれない。

(……………ん?)

急いで装備と物資を掻き集めていると、大木の陰に隠れるようにして立ち尽くしているオッサンを発見。私は一応声をかけてやる。

「おい、バリー。そこで何をしている？ もうすぐ出発するぞ」

オッサンは私に声をかけられ、一瞬、ビクツと全身を震わせた。で、何者かから狙われている被害者みたいに、辺りをキョロキョロと憔悴した面持ちで見渡している。

「お、俺は行かないッ。冗談じゃない……夜中にこんな山中を進むなんて、マツ。DXの前でパンツを脱ぐようなもんだッ！」

例えの意味はよく分からないが、彼は完全に怯えきっていた。

『バリー・バートン』——38歳。血液型・A型。身長186センチ。体重89.3キロ。元SWAT。火器関係の知識が豊富で、隊内での火器の整備・補充を担当。モイラとポリーという二人の娘がおり、家族を大切にしている。けれど……

バサバサバサバサツ——！

「ふぎやああああああああああああああああああああ
ツツツ——！」

バリー、絶叫。

「落ち着け！ 野鳥が羽ばたいたただけだ！」

オッサンは極度のビビリだった。カツと両目を見開き、口をアングリと全開にし、その場に力無くへたれこむ始末だ。

「よし、全員出発するぞ！」

真夜中の行進が始まった。これから先、我々の身にどのような怪現象や敵やトラップが待ち受けているか……私だけが知っている。

さっきも言った通り、私は黒幕の一人。今回はS・T・A・R・S・のメンバーを使って、アンブレラ社が開発したB・O・W・(生物

兵器」と一定の環境下で戦わせ、その実戦データを記録するのが主な目的だ。そこから得られたデータはB・O・Wの更なる性能向上につながり、アンブレラ社は“次なる段階”へと発展できるだろう。

『アンブレラ社』——アメリカでの家庭用薬品シェア90%を誇る、全米?1の巨大複合企業であり、その裏の姿は、細菌兵器や生物兵器を開発する死の商人。

今回は、アンブレラ社が管轄する地下研究施設の一つに事故が発生し、施設及び、偽装のために建てられた洋館までもがウイルスに汚染された。で、アンブレラの上層部から私に指示が下ったワケだが……私には上層部の思惑とは別に目的がある。研究施設の最深部に保管されている、オリジナルの『T-ウィルス』を首尾良く奪取し、アンブレラのライバル企業への手土産とするのだ。今回得られるであろう貴重な実戦データとともに。

(ただ、問題は……)

私は隊列の先頭に立ち、チラツと後ろを振り返る。

「なあ、ジル。署内の連中がオレのこと見ながら、“ゴリラだゴリラ”って指差して言うんだけどさあ、どうしてだ？」

「脳筋でマツチョで、デスクの引き出しに常にバナナを常備してるからよ」

バナナ片手に歩くクリス。おい……拳銃はどうした？

ロケラン担いで歩くジル。おい……いきなりソレはねえよ。

「やっぱ危ねえよ、ウェスカー！ 蚊に刺されてかゆくなったトコをかいで、そこからバイ菌が入ったり、野犬の遠吠えでビックリしてショック死するかもしれんッ！ なあ、引き返して救援を待とうッ！」

文句ばつかたれるバリー。おい……娘の写真を握り締めて泣くな。(まあ、いい。洋館に着きさえすればどうにでもなる)

そう思いながら我々は行進を続ける。

私はアルバート・ウェスカ！。
果たして、何人が明日の朝日を浴びられるだろうか。あるいは――

こっぴうヤツは大抵、次のシーンで死ぬ

やあ、みんな。私の名はアルバート・ウェスカー。前回のエピソードを読んでくれた人達は知っていると思うが、私は今、数名の部下を引き連れて真夜中の山中を行進している最中だ。クリス、ジル、バリー……三名とも非常に有能な部下で、どれだけ有能なのかRPG風に説明すると、ラスボスの魔王相手に竹やり装備して突っ込んでいく勇者ぐらい有能である。

「なあ、ウェスカー……今、獣の唸り声みたいなのが聞こえなかったか？」

私の隣でショットガンを構え、しきりに周囲を警戒している男が小声で呼びかけてきた。彼の名は『ジョセフ・フロスト』——27歳。血液型・B型。身長179センチ。体重72.3キロ。チームの整備技師。危険物取り扱いなどの資格を持ち、車軸整備を担当。血の気が多く暴走気味な性格で、緊急時の行動には不安がある。ちなみに……もうすぐ死ぬ予定。何故なら、さっきから死亡フラグの乱立が止まらないから。B級ホラー映画で最初に死ぬ名も無い出演者——と同様の空気をもし出しているし。銃を構えて周囲を警戒する仕草が全体的に小物っぽい。こういう輩は、見ている人達に最初のインパクトを与えるためだけに大概が犠牲になる。本人は悪くないが、犠牲になる。

<ん？ 何だ？ 何かいるのか？> ↓ <武器を構えてオロオロ
> ↓ <な、何だ……気のせいかな……> ↓ <うわあああああああああああッ！！>

——レギュラーキャラになれないヤツは、上記のような単純な流れで事務作業のごとく片付けられる。悲しいが、それが自然の摂理であり、それがゲームのプロデューサーの意向である。

ザッ
……
ザザザッ
……

辺りの雑木林から聞こえる、何者かが接近しつつある音。

「おいおい、何だよ……？」

「さあね。でも……あまり友好的な雰囲気じゃあないわね」

相手の姿は目視できない。が、確実に耳に届いてくる草木が何かに擦れる音……クリスとジルが背中合わせで警戒する。さすがは私の部下。この程度では全く動じない。

「ひいひいひいひいひいひいひい—— ツツツ！
何かいるううう
ううううううう 「！」

バリー、やかましい。産まれたての小鹿みたいに脚を震わすな。
（さて、そろそろ走るか）

これも私が施した仕掛けの一つだ。この近辺にT・ウィルスに侵された犬、いわゆる“ゾンビ犬”を数匹配置しておいた。

『ケルベロス（ゾンビ犬）』——ドーベルマンをベースに造られたB・O・W。研究施設内でのバイオハザードに伴い、飼育場から脱走。付近の森で野生化していた。犬本来の俊敏な動きや習性を失っておらず、他の個体と連携して獲物に襲いかかる。

ザザザザザツ——！！

「うっ、うおおおおッッッ!?」

パ
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
—
ン
！！！！

ジョセフの叫び声とともに鳴り響く、シヨットガンの発砲音が、銃弾は命中せず、一体の黒い影が勢い良く跳びかかってきて――

「わんわんおッ、わんわんおッ、ボクはわんわんおだおッ」

$$\begin{array}{r} > i \\ 3 \\ 4 \\ 6 \\ 8 \\ 5 \\ \hline 3 \\ 9 \\ 6 \\ 1 \\ < \end{array}$$

—しやべった？

「た、助けてくれⅰⅱⅱⅱⅱⅱⅱ」

「！！」

ジョセフの喉元にガブリと食いついている。同時に、次々と別のゾンビ犬が草むらの中から跳びかかってきて、倒れているジョセフの腕や脚に食らいついていった。

(……………んん?)

ウェスカーが小さく首を傾げる。何だか……様子がおかしい。食らいついてはいるが、ジョセフからは特に出血している様子も、肉を食い千切られている様子もうかがえない。まるで、与えられたオモチャと戯れているみたいだ。

「わんわんおツ、久しぶりの獲物だおツ！ ゆっくり遊んでいくんだおツ」

ゾンビ犬なのに、妙に無邪気な笑顔だ。肉体の所々が腐敗し、片目なんか飛び出しちゃってるのもいるんだが、連中は教育番組のアニメキャラみたいな声でしゃべって、とっても楽しそうにじゃれている。

「ジョセフ！ 今、助けてあげるわツ！」

「待て、撃つんじゃない！ あれだけ密着した状態ではジョセフにも当たってしまう！」

オートマチックを構えて今にも引き金を引きそうになっていたジルを制し、私は冷静に観察することにした。

(おかしい……ヤツ等はもっと凶暴で、人など容易に噛み殺してしまふハズなんだが……もしか、野生化して何だかの突然変異でも起こしたのか!?)

キラ〜〜ン

考えのまとまったウェスカーのサングラスが煌めく。

キラ〜〜ン

ジルが手にするオートマチックの銃口が、月明かりに照らされて一緒に煌めく。つまり――

パアアアアアアアア――ン！

撃ちやがった。銃弾は群がるゾンビ犬に……

「いつでええええええエエエエエエー！！ 畜生ッ、ジル！
ドコに撃ってやがるッ！」

……いや、ジョセフに命中した。やはり、尻に。

「びつくりしたおッ！ ボク達はただ、人肉をハムハムするのが好き
なだけなんだおッ！」

そう言っただけで慌てて散っていくゾンビ犬の群れ。逃げていくその後
ろ姿は何故だかキラキラしてて、外見がグロでさえなければ微笑ま
しい光景なのだが。

「あははははああゝゝゝ まてまてええゝゝゝ」

状況を勘違いしまくったクリスが、バンザイしながら爽やかな笑
顔で追いかける始末。おい、止まれ。どんだけアクティブなムツゴ
ロウさんだよ。

「追うんじゃない、クリス！ まずはジョセフの手当てが先だ！」
私にとっては完全に予想外だった。完璧に死亡フラグが立ってた
んで、ジョセフはここで“オラは死んじまったアゝゝゝ”……にな
るハズだったのだが。

「おおっと、そうだった。おい、ジョセフ！ 傷の具合は……

こ、コイツはッ！」

「どうかしたの、クリス？」

「ケツが割れてるッ！ そうか……ジル、全てはオマエの陰謀だっ
たんだなッ！」

「ああ……面倒臭い」

——パンッ！

イラッとした顔でジルがまたしても発砲。

「うわおッ！？」

クリス、自分の尻を両手でかばいながら飛び跳ねる。

「……………おい、いいかげんもう行くぞ」

ゾンビ犬に追いかけて洋館に逃げ込むという算段は無しにな
ったが、我々が洋館に行くという予定に変更は無い。

「ウエスカー……俺の事は気にせず先に行ってくれ。ケツが痛すぎてまともに歩けそうもない……」

ジョセフの表情がとつても微妙。ゾンビ犬に食い殺されそうな光景にみまわれながら、結局、味方から尻を銃撃されてリタイア。

「安心しろ、ジョセフ。後で救助隊のヘリに連絡しておく。ボラ。ノール持参で急げとな」

私はそう言つてサングラスを不敵に光らせた。

「ああ、軟膏タイプで……よ、よろしく……ぐふっ……」
ジョセフ、果てる。

「おい、バリー！　いつまで木陰に隠れている。走るぞッ！」

少し離れた所で、大木の陰から顔面を半分だけのぞかせてこつちをうかがうバリー……仲間を助ける気はハナっから無し。

「すまん、ウエスカー……俺もここでリタイアだ」

バリーの額が大量の脂汗で濡れている。そして、股間も濡れている。

「ま、まさか……40前のオッサンがか！？」

バリー、家で帰りを待つ妻と二人の愛娘に何て言う気だ？　病気もケガも無かったが、失禁はしてしまった……そう告白する気なのか？

（まさか、ここまでヘタレだったとは……私の考えが甘かった）

私は気まずい気持ちを胸にしまいながら、ゆっくりと踵を返した。さようなら、バリー。オマエも立派なメンバーだった。

——パンッ！

「うわおッ！？」

バリー、木陰から跳び出す。いきなりジルに発砲されたから。

「全速力で走れよ。早く乾くかもよ」

このアマ、すべからず暴力で解決しようとしやがる。

——と、いうワケで、私達はささやかな月明かりを全身に浴びながら、呼吸を荒げ、鬱蒼とした山中を駆け抜けていく。そして、数

分後……到着した。

「こ、コレが……その洋館なのか？」

クリスが呆けた声で建物を見上げる。

「何か……禍々しい空気が漏れているわ」

目を細めて警戒するジル。

（さて、諸君。ここからが本番だ。しっかりと戦闘データを記録させてもらうぞ）

口元をわずかに歪めて微笑む私、ウェスカー。生か死か——この館の中で待ち受けているのは——

「……………あ、ホントに乾いてる」

バリー、空気読め。

金持ちの屋敷」デカイ・不気味・ダレもない

ギギギイイイイイイイイ~~~~~

> i 3 4 6 8 6 — 3 9 6 1 <

正面玄関の大きな扉が、静寂に軋む音をたたせてゆっくりと開いた。

「これは……見事な豪邸だなあ！」

私はわざと驚いてみせた。この洋館は、地下に建設されている実験場を隠すための大がかりなフェイク。そして、今から私のカワイイ部下達が死闘を演じる巨大な迷宮となるのだ。

「ちよつとオオオ~~~~、ダレかいるウウウ~~~~!？」

ジルが呼びかけてみた。不法侵入したにも関わらず、全く人が出てくる気配が無い上、物音一つしない。やたらと広い玄関ホールに四人の生存者——まさにホラーの王道的スタートだ。

「よし、まずは全員の装備と持ち物をチェックだ」

そう言っただけで私はクリス・ジル・バリーの三名と目を合わせる。この巨大な館の中には性能をある程度調節しておいたB・O・Wが、各ポイントに配置されている。全く武器を持っていない状態で館の中をウロつかれても、適切な戦闘データの回収はできない。部下達がどんな装備や道具を準備しているのか、上司である私がしっかりと把握しておかねば。で……

数分後

「……………おい」

私は床の上に片膝を落とし、“考える人”のポーズをとっていた。床の上に陳列した持ち物一式に対する、私なりの最大のリアクショ

ンである。では、簡単に紹介しよう。

●クリスⅡバナナ（黄色）、バナナ（黄緑）、バナナ（腐りかけ）、バナナ（ヌイグルミ）

「クリス、支給された拳銃はどうしたんだ？」

「すまん、家に忘れた」

「で、オマエのバックパック……何故、バナナだらけなんだ？」

「おいおい、ウエスカー。知ってるだろう？ オレが一定時間ごとに新鮮なバナナを摂取しないと、命にかかわる発作が起きるのを」

「いや、初耳だ」

「そうか。なら、今から説明を――」

「いや、結構だ」

私はクリスの発言権をサラッと無視して、自分のホルスターから予備の拳銃を抜いた。

「コレを使い」

そう言っただけで私がクリスに手渡したのは、『ベレッタM92FS』。9ミリパラベラム弾が装填されたオートマチックの拳銃だ。そして、次……

●ジルⅡケータイ、コスメポーチ、自爆スイッチ（乙）、自爆スイッチ（甲）

「ジル、さっきオマエがクリスとジョセフの尻を撃った拳銃はどうした？」

「ここに来る途中で捨てたわ」

「……………は？」

「だって、むさい野郎二人を撃った銃なんかもう使いたくないし」
「じゃあ、最初っから撃つんじゃないよ。」

「で、どうしてケータイが？ 無線機を持ってるだろう」

「やだッ、ウエスカーったら知らないのオ？ 今はケータイで登録しておくだけで生理日予測ができるのよ、ルナ。ナで」

何の心配してやがる。

「後…………『自爆スイッチ』ってサインペンで書かれている、この縄跳びの持つ手みたいな装置は何だ？」

「ええつとねえ〜、（乙）を押すとクリスのヌイグルミが爆発して、（甲）を押すとウエスカーのサングラスが爆発するわ」

「あッ、危ねえエエエエエエ——ッ——！」

私はお気に入りのサングラスを思いっきり投げ捨てる。

「クリス、何してるッ！？ 早くその珍妙なヌイグルミから離れろッ！」

私はかなり焦り気味で警告する。

「ダメだ…………オレにはできない」

「……………は？」

「このヌイグルミは誕生日に妹からもらったプレゼントなんだ…………毎晩抱き枕として一緒に寝ているんだッ！」

クリス、エピソード的にはイイ話なんだが、使用用途が圧倒的に気持ち悪い。

「あひゃひゃひゃひゃッ！ うそうそつ、そんなの嘘よッ！ やつだもつ、本気にしちゃってさあ！」

腹を抱えて笑うジル。このアマ…………ラクーン市警に戻ったら絶対減給してやる。

「仕方ない、オマエにはコレを渡しておく」

そう言っただけ私はサングラスをかけ直しながら、『コンバットナイフ（M9）』をジルに貸してやった。アメリカ軍に正式採用されている、自動小銃に装着できる銃剣だ。そして、最後に…………

●バリー＝コルトパイソン、娘達の写真、遺書、紙オムツ（大人用）
「一応、強力な武器を持ってきたのはいい。娘の写真も別に構わん。で…………オマエは遺書とオムツをセットで持ち歩いているのか？」

私はもうなんか、真面目に質問する気力が失せはじめていた。

「そ、そりやそうだろ……常に危険と隣り合わせな仕事だからな。いきなりさつきみたいな野犬に襲われて、心臓麻痺なんか起こした時のためだ」

バリーのハートはガラスどころか豆腐でできているようだ。

「で、この紙オムツなんだが………どうにかなんのか？」

「ま、まさかツ、使うなって言うのかッ!？」

バリー、本気でたじろぐ。どんだけ股間の括約筋が緩いんだよ。

「使うなどとは言わんが、正直……オマエには恥や外聞を気にする余裕は無いのか？」

「あつてたまるか!！」

何で仁王立ちで威張るんだよ。

「まあ、いい。予備の弾薬なら私が少し持っているし、四人でかたまつて行動すれば何とかなるだろう」

私はサングラスを中指でクイツと直し、部下達に一瞥をくれた。

「で、これからどうするワケ？ あたし達の任務はブラウオーチームの搜索………だけど、夜間の山中はさつきみたいな野犬の群れが現れて危険よ」

ジルが私のことをキツと睨みつけながら言った。

「ああ、その通りだ。山中での搜索は明日の昼間に変更する。そして、今からこの館の中を隅々まで探索する」

「どうしてだ？」

クリスがマヌケな面で問う。バナナの皮をむきながら。

「もしかすると、ブラウオーチームのメンバーが我々と同様にこの館にたどり着き、中を彷徨っているのかもしれない」

「な、なるほど………可能性はあるな」

バリーが頷く。紙オムツをはきながら。

「じゃあ、どうする？ この玄関ホールからいくつか扉が見えてるけど、ドコから行ってみる？」

ジル、やる気を出してくれるのはかまわんが、ケータイでモバゲーにアクセスするんじゃない。

「よし、まずは左に見えるデカイ扉の部屋からだ。いいか、今のところ人の気配は無いが、どんなアクシデントに見舞われるか分からん。各自、決して気を緩めるなッ！」

私は櫓を飛ばしてやる。

「おおッ！」

「了解したわッ！」

「た~~~~か~~~~の~~~~つ~~~~め~~~~！」

おい、変なのが混じってるぞ。おそらく、家で娘達と観た深夜アニメに影響されただろうが、ここはあえて無視。

ガチャ――

その大きな扉に鍵はかかっておらず、すんなりと開いた。

「へえ~~~~、どうやら食堂みたいね。人は……いないようね」

最初に入ったジルが周囲を警戒しながら小声で呟く。

カッチ、カッチ、カッチ……………

年代物の柱時計が静寂の中で時を刻んでいる。

「だが、どこかに人がいるのは確かだな。暖炉に火がついている」

バリーの言う通り、瀟洒な造りの暖炉の中で炎が燃え盛っている。

「気味が悪いなア……さっきまで生活していた住人が、煙のように消えちゃったみたいだぜ……」

クリスが中央の大きなテーブルの表面を指でなぞり、ポツリと呟いた。その広い食堂は2階まで吹き抜けになっており、古めかしい内装だが丈夫な材質で建てられているせいか、破損や劣化の様子は見て取れない。

「おい、コイツを見てみる……」

私はそう言って暖炉の前の床を指差した。そこにはおびただしい量の血が水溜りを作っていて、暖炉の炎に照らされてより一層の不気味さを漂わせている。

「おいおい、マジかよ……！」

クリスが思わず息を呑んだ。

「どうやら、“アクセシデント” ってのがもう登場したみたいね」
ジルがナイフの柄を力強く握る。

「や、ヤバイ……は、吐きそう……!」
バリー、よそでやれ。

(さて、頑張ってもらうぞ——諸君)

私はこの後の展開に期待し、思わず口元を歪めるのだった。

死体を見つけたら、食べる前に通報してください

「よし、まずは二手に別れる。ジルとバリーでこの食堂をしばらく調査してくれ。私とクリスはこの扉から出て近辺を調べてみる」

そう言っただけ私は、食堂に入って来たのとは別の小さいドアを指差した。

「いいの？ さっきは四人でかたまっただけで行動した方がイイみたいな事言っただけだ」

ジルが少々心配そうに言う。

「心配ない。そう遠くにはいかない。搜索に時間がかかる場合、玄関ホールを中心になるべく安全地帯を確保して、一帯を拠点にした方が効率的だ」

「分かったわ。じゃあ、頼んだわよ。クリス」

「おお、任せておけ」

ボタンッ――

ドアが音をたてて閉まる。私とクリスは横に伸びた細長い廊下に出た。左か右か……私は当然、この洋館の内部構造を把握しているため、ドコに何の部屋があり、どんなトラップやB・O・Wが配置されているか知っている。

「よし、まずは左に向かおう」

私はそう言っただけクリスに先に行くよう手で合図する。左に行った先は、さっきの食堂で食事をした者達がコーヒーや紅茶を楽しむ『ティールーム』になっている。が、現状は……

（さて、クリス……まずはオマエの緊急対応能力を試させてもらう）
私はサングラスを中指でクイツとやりながら、自分の拳銃に手をかけた。

グチャ、グチャ、グチャ……………グシュウウウ――

「な、何だ……？」

肉の塊を攪拌するような生々しい音がして、クリスの歩く足が止まる。

「お、おい……アンタ、ここの住人か？」

人がいた。クリスの方に背中を向けて、床に両膝をついて何かしている。妙だ……赤黒い染みで所々が汚れ、ボロボロに擦り切れた服。こんな豪勢な館に住む住人の姿とはとても思えないし、床一面に広がる液体は――

「ま、マジかよッ――！？」

おびただしい量の血だまりには一体の人間が倒れており、その人間の体にはいくつも食い千切られた痕が。

「なんてことだ……アレは、ケネスじゃないか！」

私は銃を片手に握りながら知らなかったフリを演じる。

『ケネス・J・サリバン』――45歳。血液型・O型。身長188センチ。体重96.8キロ。化学兵器に対する対策・防護専門。偵察、陣地確保といった危険を伴う任務につく。無口でチーム最年長、チームでは唯一の黒人系男性。彼は今――死んでいる。ダレがどうみても死んでいる。首の肉を食い破られているのだから。

「貴様、動くんじゃない！」

いきなりの惨状を目にしたクリスが、さっき渡したベレッタを手に――

<うううううう……あアアアア……>

“ソレ”は乾いた呻き声を漏らしながらゆっくりと立ち上がった。そして、クリス達の方を振り向いたその顔は、どう見てもまともな状況にある人間の面ではなかった。髪の毛はほとんど抜け落ち、皮膚は青白く変色して所々が腐敗している。口元にはケネスのモノと思われる血がベツトリとこびりついていた。

「どうした、クリス！？ こいつはどう見てもバケモノだ！ 早く

撃て！」

「だ、ダメだッ……弾が出ない！」

「落ち着け、クリス！ オマエが構えているのはバナナだッ！ 十分に熟したバナナだッ！」

「し、しまった、緊張のあまり……オレとしたことが！」

ムキムキ……ムキムキ……

「これでよし」

「よし”じゃねッ！ 皮をむいてる場合じゃないだろうがッ！”

モグモグ……モグモグ……

「食うなよッ！」

「し、しまった……オレの脳が制御しきれず……つい」

クリスの人生は脊髓反射の積み重ねのようだ。つまり、魚や昆虫と同じ部類。人類失格、バンザイ。

（こいつはヒドイ……ここはひとまず大食堂に退却だな）

戦闘データを記録するタイミングを失った私は、クリスの襟首を掴んで引っ張っていく。

——バタンッ！

「ちょ……どうしたの、二人とも！？」

食いかけのバナナを喉につまらせながら引きずられてきたクリスと、慌てる私の姿を見たジルがおののく。

「き、気をつける！ この先にとんでもないバケモノがいた！ ケネスが食い殺されていたんだ！」

私はいつもより更に真剣な声で警告してやった。いきなり予定が狂ったが、こうなれば仕方がない。この大食堂にもうすぐ踏み込んでくるであろうさっきのバケモノ……ヤツにどう対応するか、ジルとバリーの分のデータも同時に記録するでしょう。

「ま、待てよッ、ウエスカー……“バケモノ”って一体、何のコトだよ！？」

柱時計を調べていたバリーがコルトをホルスターから抜いた。『

コルトパイソン』。高威力のマグナム銃で、357マグナム弾仕様のリボルバー式。

「確信は無いが、アレは……おそらく『ゾンビ』ってヤツだ」

『ゾンビ』——正確には“活性死者”と呼ばれる、T-ウィルスに感染した人間の初期段階。ウィルスによる遺伝子変質で新陳代謝が活発化しており、強靱な力や、銃で撃たれても死なない体力を持つに至るが、同時に細胞の壊死サイクルも早くなるため、外見は所々が腐り落ちた死体のようになっている。ウィルスにより前頭葉が破壊されるため、思考力はほとんど無く、代謝の増大に伴う激しいエネルギー消費から常に強い飢餓感を抱え、食欲を満たそうと食物を求めるだけの存在。感染前の習慣、記憶は多少残っているが、思考能力を失っているため、行動は自分に関わりのある場所を徘徊したり、ドアの開閉を行う事のみにとどまる。

「ゾンビですって？ モ。ダー、アナタ疲れてるのよ。ゾンビなんて架空のモンスターが現実存在するハズがないじゃない」

ス。リー……いや、ジルが半分呆れた感じで言う。

「い、いや、マジだって！ オレもケネスが食われてるとこ見たし！」

クリス、慌てながら次のバナナの皮をむくんじやない。

ギイイイイイイイイ……

ノブが回り、小さなドアがゆっくりと開く。そして、半開きになったその隙間から——“ソレ”はヌツとその威容を現した。

「ほんぎゃあああああああああああああああああああああ
あ——ツツツ——」

バリー、大・絶・叫。と、同時にジルが——
「せいやッ——」

——パンツ！

ドアめがけて跳び蹴り。当然、大食堂の中に入りかけていたソイツは、ドアと壁の間に思いつ切り挟まれるワケで。

<ああアアアアア——>「ちッ！！」>

ゾンビが痛がつとる。

<いきなり何しはりますのオ——ん！ わてが食事中に後ろでバタバタ騒がしいから、こうして様子見に來ただけですやん——！>

しかも、流暢にしゃべってる。

「クリス、コイツがそうなの？」

「あ、ああ……ソイツに間違いない」

「ふ——ん、見た目は確かにグロいわね。けど、ホラーメイクか何かじゃないの？」

ジルはグイグイと脚に力をこめながら、目を細めてゾンビの方を睨みつけている。

<おッ、よ——見たらキレイなネーチャンがおるやないけッ！ どうや？ わてと一緒に腐乱ス料理でも食わへんか？>

ダジャレまで飛び出す始末だ。

（一体、どうなっているんだ……外のゾンビ犬といい、このゾンビといい……Ｔ－ウィルスが想定外の方向に進化したのか？）

私は少々考え込んでしまいそうになったが、ここは一先ず撃退しなくては。

パンツパンツパンツ——！！

ベレッタを構えて連射。ゾンビの頭部に全て命中する。

<あうッ、あうッ、イタタタッ！ 何すんねん、このグラサンオヤジがッ！ そんな危ないモン撃つてきはったら、わて死んでしまうがなッ……って、あ、わてもう死んどるわ>

おかしい。胴体ならともかく、頭部にあれだけ９ミリ弾を食らってまだ倒れないとは。

「コイツならどう！？」

ザクッ——

コンバットナイフをドア越しに突き立てるジル。その刃先はゾンのデリケートゾーンにヒット。

> i 3 4 6 8 7 — 3 9 6 1 <

< おオオオオオオオ ———— つちッ！！　　そ、それはあきまへんわあゝゝ……人間はやめても男は廃業したくありまへんでゝゝ……>

————— ドサッ

倒れた。股間を両手で押さえながら。

「さすがだぜ、ジル！」

クリスが親指立てて笑顔。

「見たかッ！　署内で“泌尿器スレイヤー”と陰口叩かれるあたしの実力ッ！」

ジルが中指おっ立てて笑顔を返す。おい……一体、署内で何やってやる。

（どうにもおかしい……イヤな予感がしてきた）

私の頬を不吉な汗が伝う。このまま館の探索を続行してもいいものなのか？　B・O・W 達のこの変貌ぶり……計画に多大な支障をきたすのでは？　だが、もう後には引けない。私は自分の仕事を全うし、必ず成果をあげてみせる！

「う……う……う……ボ、ボッシュート、です………」

失神したバリーが後ろの方で意味不明にうめいていた。

鉢植えの植物を引っこ抜くという発想

「これは……………ヒドイわね」

ジルが片手を自分の口元にあてがいがら呟いた。彼女の目の前には、首を食い破られて果てたケネスの遺体が横たわっており、恐怖にひきつって両目をカッと見開いたままになっている。実に無念な最期をとげたようだ。

「狂ってやがる……………ゾンビが何か知らんが、人間を食い殺すなんて正気の沙汰じゃねえよ」

そう言ってクリスはケネスの遺体の傍でしゃがみこみ、遺体の状態を観察する。

「クリス、何か他に変わった所はあるか？」

ズリズリ……………ズリズリ……………

私は気絶したままのバリーを引きずりながら、クリスに問う。

「……………ん？ 何か手に持ってるぞ」

クリスがケネスの手に握られていた物体を発見する。ソレは——『フィルム』だった。おそらく、この館の中を撮影したものだろう。再生するための設備があれば、中身を確認してチームメンバーの捜索に役立つかもしれない。

「よし、フィルムは私が預かる。全員、先に進むぞ」

私はケネスの猟奇死体が視界に入らぬよう、バリーに目隠しをしてやってから、彼の頬をペチペチと叩いて起こしてやる。

「バリー、しっかりしろ。探索を続けるぞ、立てるか？」

「……………んんッ、う……………う……………ん？」

バリーが目を覚ます。オハヨウ、役立たず。

「うわああああああッッッ！ ま、真っ暗だアアアアア！
ついにこの世が終焉を迎えてしまったアアアアア——……………げ
ふッ」

バリーが再度失神する。オヤスミ、役立たず。

「仕方ない。バリーのメンタル面が回復するまで、ここに寝かせておくでしょう」

そう言つて私は気絶したバリーを優しく寝かせてやった。ケネスの死骸の隣に……。

バタンツ――

ティールーム真横にあるドアを開くと、薄暗い廊下に出た。

「ん？ 何よ……コレ？」

廊下を行った先には階段が見えており、その手前に少し開けた空間があつて、小さな棚のような家具の上に鳥カゴが乗っていた。

「真つ黒な羽が幾つも落ちてるな……カラスでも飼つてたのか？」

クリスが辺りに散乱している羽を指でつまみ上げ、渋い表情になっている。鳥カゴでカラスを飼う――もし、事実なら、この洋館の住人はどうしようもなくイカレている。だからなのか……さっきのようにやたらとハイテンションな死体もどきが居るのは。

「クリス、ジル、その鉢植えに生えている緑色の植物を調べてみる」

私はそう言つて、階段のすぐ脇に並んでいた二つの鉢植えを指差した。ソレは『グリーンハーブ』。アークレイ山中に自生している特殊な植物だ。どう特殊なのか、私の口から説明したいところだが、そうしてしまうと「何故、そんな効果まで詳しく知っている？ ま、まさかッ！？」――ってなコトになりかねない。だから、ここはクリスとジルの両名にそれとなく使用用途を教えてやらねばならない。いくら特殊部隊の精鋭達とはいえ、この洋館の制圧だけでも無傷で済むワケはないのだから。

「何よ、ただの観葉植物じゃない」

「そうだな。特に変わったトコは無いな」

二人とも全く関心は無し。まあ、それが普通のリアクションだ。

グロテスクなバケモノが出没するような館に生えている植物を使って、体力やケガの回復を図ろうなんて発想……その人間の良識を疑いかねない。

「まあ、待て待て。これ見よがしに並べてあるという事は、何か意味があるハズだ」

私は疑惑が持たれないよう、自分のバックパックからおもむろに携帯端末（PDA）を取り出して操作した。

「多分、コレだな。うん、間違いない」

「一体、何なのよ？」

「コレを見てみる」

私はジルにPDAを手渡した。モニターにはアークレイ山中とその近辺に自生する、珍しい植物の一覧が映っている。

「ええつと……『グリーンハーブ』？ 使用することで体力を少々回復できます。他のハーブと組み合わせることにより、別の効果を発揮する場合も」

ジルはモニターを見つめながら、鉢植えからグリーンハーブを摘んだ。

「ふ〜ん……で、どうやって使うんだ？ やっぱ“ハーブ”って言うくらいだから、お茶にいれたりして飲むのか？」

クリスが小さく首を傾げた。そう……実のところ、そこが一番の問題なのである。私としても、このハーブの使用方法には多少の疑問点を抱えているのだ。

> i 3 4 6 8 8 — 3 9 6 1 <

ハーブの正しい使用方法（例）

？ 煎じて飲む（専用の道具一式が必要になってしまう）

？ 豪快に生食い（確実に消化不良を起こす）

？ 潰して汁を傷口に塗る（一番現実的だが、塗ってすぐ傷口が治癒したらソイツこそバケモノ）

？ 嗅ぐ（ダメージ受ける度に葉っぱの臭いをクンクンしてる画が、ヤバイ中毒患者に見えてしまう）

？ 目に入れる（単に痛いだけ）

「各自で好きに使え」

私は迷ったあげく、放任主義をきめこんだ。

「よし、それじゃあ行くか」

ハープを分け合い、目の前の階段を上り始める。

ギシギシ……

「アン アン」

ギシギシ……

「アン アン」

ジル、妙な擬音を呟くんじやない。発想が完全にオッサンだ。
ボタンツ――

階段を上った先にはドアがあつて、開けると壁に小さな松明がある廊下に出た。ドアのすぐ右には別の通路が続いており、そちらの通路の突き当たりの所に大きな鏡があつて、その鏡に――

「出やがったなッ！」

クリスが身構える。鏡に映る少々小太りの動く死体。ゆっくりと歩を進め、こつちへ向かっている様子が分かった。

――パンツ！

クリス、発砲。

パライイイイ――ン！

割れる鏡。

「ぬッ、しまった！ 残像かッ!？」

残像どころか別の物体に向かって撃ってるし。オマエは鏡の機能に戸惑う小学生か？

<いらっしゃあゝゝい！ 久しぶりのエモノ、三名様ご案内やでえゝゝ！>

またしても妙に元気な歩く死体。クリスめがけて楽しそうに襲ってきやがった。

「近づくんじゃねえッ！」

ボゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
—— ツツツツ！！

クリス、殴った。素手で。

くうつひよおおおおおおおッ！ 胴体さんサイナラあゝゝ！>
ゾンビの頭部が見事にブツ飛ぶ。

「やるわね、クリス。ゴリラパワーはやっぱ伊達じゃないわ」

ジルが微笑みながら親指立てたりしているが、クリス……頼むから普通に銃を使ってくれ。まともな戦闘データがとれん。

「ここはクリアだ。隣の通路から進もう」

今度は私が先頭になって、左右の壁に沢山の細長い槍が立てかけられた廊下に行く。壁に設置された小さな松明の灯りが反射して、なんとも不気味に煌めいている。そして、その通路の途中で、一体の小さな石像を発見。石像は『黄金の矢』を携えている。

「ジル、その矢を回収するんだ」

「は？ …… どうしてよ？」

確かに不自然な指示だ。不法侵入した上、人の家の高価そうなオブジェを持っていくとして。行為自体はコソドロのソレと変わらない。が、各ポイントに設置されている様々なアイテムを回収し正しく使っていないと、このミッションそのものはおろか、館の制圧すら不可能なのだ。精密な戦闘データを正しく記録するため、ドコに何を設置してどんな仕掛けを作動させるか……どんなタイミングでどんな資料等を発見させるか……全て緻密に計算し配置したおかげでカナリの自腹を切った（ドンキで小道具買ったりして）。有給休暇もほとんど使い果たした（私は毎日何をやっているのだろう……そう思いながら）。そんな私の地道な努力を、いきなり徒労に終わらせるワケにはいかない。

「証拠物件の押収だ。この館で我々のメンバーの一人が殺されてい

「たんだ。裁判で有利になるに越したことはない」

「なるほど、さすがはウェスカー。抜け目が無いわね」

「ジル……騙す私が言うのもなんだが、オマエは簡単に納得し過ぎ。よし、次はこっちのドアから行くぞ」

我々から見て正面と右側にドアがあり、私は右側のドアを警戒しつつ開ける。同じ頃――

「う、うゝん……あ、あれッ………皆、どこだッ？」

ティールームで置き去りにされていたバリーが、気絶から目を覚ました。周囲を見渡しても仲間の姿は確認できず、代わりに……ケネスの変わり果てた姿がすぐ隣でコンニチハ。

「……………死いゝねゝばゝイイのにゝ 死ねばイイのにッ
♪ ドコかゝ遠いゝトゝコゝ口でゝ」

ついにバリーが壊れた。珍妙な歌を口ずさみながら、大食堂の方にヨタヨタと歩いて行ってしまった。

親方あゝ、空から女の子（石像）が！

我々は広めのスペースに出た。どうやらここは、吹き抜けになっている大食堂の2階部分のようだ。1階の大食堂を上からグルッと取り囲むようにして、狭い廊下のみがあつて特に目立つ障害は——<うううう……あああ……>

——いや、あつた。少し離れた所にゾンビが一体徘徊しているのが確認できる。

「よし、これはチャンスだ。これだけ離れていれば、安全に銃で倒せるハズだ。クリス、今度こそ頼んだぞ」

「おおッ、やってやるぜッ！」

勇ましくベレッタを構えたクリスに対し、我々に気づいたゾンビがゆつくりと迫つて来た。

パンッパンッパンッ——！

9ミリ弾が三発命中するが、ゾンビの歩みは止まらない。

「くそッ、こっちに来るんじゃねえッ！」

更に顔面にも二発命中させたが、まだ怯む様子は無く、どんどんクリスとの距離を縮めて前につんのめるようにして覆い被さつてきた。

<捕まえたでえ……、このクソガキヤ……！ 人の家に何しに来よつたんや？ はっはあ……ん……野郎二人に若い女が一人。このスケベ共がッ！ よそ様の家で盛つちやいけませんって、お母ちゃんから習わんかつたんかッ！？>

いきなりゾンビから説教された。

「ワケ分かんねえコト言つてんじゃ……ねえよッ！」

マズイ。体勢が整つてない状態でガツチリと組みつかれたため、上手く引きはがせない。このまま力任せで引きはがそうとすれば、ゾンビの鋭利で不潔な爪で裂かれるかもしれない。どうすれば——！？

「クリス！ 真横の棚に何かあるぞ！ ソイツを使え！」

私は苦戦するクリスに大声で教えてやった。

「んツ？ お…… コイツは——！」

左の壁に造られた簡易棚から、キラツとシャンデリアの光が反射してきた。その光は棚に置かれた一本のダガーナイフからのものだった。『ダガーナイフ』。ゾンビの噛み付きや即死系のつかみ攻撃を受けた時に使用できる、ディフェンスアイテム。

「これで——ッ、どうだッ！！」

グサツ！

ダガーナイフを掴み取ったクリスが、ゾンビの側頭部めがけて勢い良く突き立てた。

<ちつくしょオオオオオ——ッ——ッ！ この世のリア充

全員爆発しいやアアアアア——ッ——ッ！>

ドサツ……

恨み言を吐きながら倒れた。

「全く……ここはとんでもない館ね。こんなのがまだ他にもいるのかしら？」

ジルが倒れたゾンビを足のつま先でツンツンしながら呟く。

「分らん……だが、普通の状況でないのは確かだ。ここから先も油断できん」

そう言って私は二人を先導し、廊下を半周回ったところで立ち止まった。我々の前に一体の石像が佇んでいる。女性をかたどったスリムな石像だ。

「ジル、この石像……何か怪しくないか？」

> i 3 4 6 8 9 — 3 9 6 1 <

私はここぞとばかりに彼女の観察眼を試すことにした。実はこの石像の中にアイテムの一種が埋め込まれており、外からは確認できないのだが、叩き壊すことによってそのアイテムを回収できる仕組み

みになっているのだ。

「ええ、確かに怪しいわ。この胸……きつと豊胸手術済みね」
石像が美容整形してどうする。

「そう言うジルはどうなんだ？ 形といいサイズといい、なかなかのモノだが」

クリス、セクハラ発言が堂々過ぎた。

「はッ、このあたしの美乳が偽造だって疑うワケ？ じゃあ、ここで触診してみなさいよ！」

——ムニムニ

——ムギyumギユ

指で押したり、手の平で軽く包んでみたり

「た、確かにコイツはホンモノだッ！ 医療技術の介入していない天然100%だぜッ！」

「でしょ？ シリコン入りは仰向けに寝ても形がくずれないから、簡単にバレちゃうそうよォ……あはははははは……！」

ジル、両腕を頭の上で組んで脇見せのポーズ。つか、普通に触らせんなよ。そして、少しは抵抗しろよ。

「バカやってないで……クリス、その手すりか途切れている所まで石像を押して行つて、下の食堂に落とすんだ」

「えッ、何言つてんだよ、ウェスカー？ そんな事したら、器物破損でオレ達訴えられるぜ！」

ああ、その通りだ。クリス、オマエの言う事はもつともなんだが、そうしないと先に進めない……と言うより、先に進ませない。だって、私の多大なる苦勞（有給全消化）を少しでも報われるものにしたいのだよ……（泣）。で、時を同じくして——

「お……い、みんな……ドコ行っちゃったんだよ……？」

完全に放置されてしまったバリーが、行くあても無いんで大食堂

に戻ってきた。やはり、ダレもない。暖炉の火は相変わらず燃え盛っているが、柱時計の時を刻む規則的な音が静寂に響くだけで、ダレかが戻ってくるような気配も無い。

（なんてこった……まさか、俺って置き去りにされたのか？ 待てよ……あるいは、他の三人が何者かに連れ去られたという可能性も！？）

ウロウロ……ウロウロ……

様々なマイナス思考が脳内を彷徨い始め、彼自身も大食堂内を意味無くウロつきだす。そして、壁際に置かれていたアンティークの壺の中を片目でのぞき、「おゝゝい、もし中に居たら返事してくれえゝゝ！」——なんて言い出す始末。もはや、末期症状が出ている。そんな時……

ゴトツ——

（えッ……何だ……？）

何か重量のあるモノが動いたような音が自分の頭上の方からして、思わず仰ぎ見た。

「——マジですか？」

我が家で待つ妻よ、娘達よ……生命保険の加入を断られた父さんを許してくれ。あと、皆の事はもちろん愛して——

——ズゴンッ！！

残念ながら走馬灯は途中退出し、バリーの頭上にデカイ石像が降ってきて——命中。

ドサッ……

俯けに倒れ伏すバリィ。そして、上の方から聞こえてくる声。

「おい、今……何かにぶつかったような音がしなかったか？」

クリスが不安を覚えて下の方をのぞき見た。

「げッ、バリーが倒れてるじゃない！」

一緒に下をのぞいたジルが指差して言う。

「おいッ、バリー！ 大丈夫かッ！？ 動けるかッ！？」

私は大声で呼びかけてやったのだが、彼は割れた額からドクドクと大流血してて、小さな呻き声を上げるだけでまともに反応していない。

「これって……オレのせいなのか？」

「確かに石像落としたのはクリスだけど、やれって命令したのはウエスカーよね」

二人の鋭い視線が私を射抜く。この空気はもしや——責任のなすり合い”か？

「だが、よく見てみる。割れてバラバラになった石像を」

私はそう言つてある一点を指差した。そこには燭台の灯りをキラキラと反射させる、一個の物体が見てとれる。それは——『青い宝石』。

「わア——お でっかいダイヤが落ちてんじゃん！ 早速、証拠物件の押収といきましょうよ！」

ジルが手の平を合わせて大歓喜。彼女の瞳には“物欲降臨”の文字が。

「慌てるな。アレを拾いに行くのはまだ早い。少しの間あのまま放置しておくんだ」

「ええッ、何でよッ！？」

ジルがあらん限りの力を込めて私につかみかかってくる。オマエ……自分が警察であるという自覚あるか？

「きつと、非常に高価なモノに違いない。あのままにしておけば、この館の住人か、あるいはこの異常な状況を生み出した犯人が出てくるかもしれん」

「なるほど……さすがね、ウエスカー。やっぱりあたし達とは頭のキレが違うわ」

またしても適当な思いつきを述べてしまったが、部下達は納得したようだ。コイツ等、なんて純真無垢なハートを持っているんだ……バカだけど。で、上の方で我々が騒がしくしている間、下の方では――

――は、はやく……た、助け……ろ………よ……

ガクッ……

最後の力を振り絞り、床に血文字を書き残したバリーが果てた。

墓場の死体も復活するのなら、刺身も動き出すのかな？

「よし、次はこつちだ」

我々は業務上過失致傷で動かなくなったバリーをさりげなく見捨て、玄関ホールの上階に続く大きな扉を開く。

「なあ、ウェスカー……オレ達って結構この館の中歩いてるけどさあ、一向に住人らしき人達に会ってないんだが」

「何が言いたいんだ、クリス？」

私は足を止めて彼の懸念に満ちた顔を睥睨する。

「もしかしてよお、あの“ゾンビ”ってヤツが“住人”だったんじゃないか？」

コイツ、なかなか良い勘をしている。野生の勘とでも言うのだろうか、そこいらのゴリラとはワケが違うようだ。バナナは欠かさず食ってるけど。

「確かに……可能性としてはありうるな」

私は軽く頷きながら玄関ホールの中央階段にある、墓石の絵が描かれたドアを開いた。

「外に出た……？ いいえ、違うわね」

ジルが月の見えない夜空を一瞬だけ仰ぎ見てコンバットナイフを抜いた。

「ここって……もしかして墓場か？」

> i 3 4 6 9 1 — 3 9 6 1 <

外に出たのは確かだったが、周囲には頑丈そうな鉄柵が張り巡らされており、苔生した石畳が広がっている。一面に見えるのは——ダレのモノとも分らない沢山の墓石。風雨にさらされてすっかり汚れており、欠けたり傾いて倒れそうになっているモノもある。

「行ってみよう。館の敷地から安全に出るための脱出経路が確保で

きるかもしれん」

私はそう言つて目の前の石の階段を下り始めた。

<こりゃあああああッッ！ 死者の眠りを妨げるヤツ等には、わてが死人代表として天誅を加えるんやでえ〜！ 手の甲をキュツとつねったりして痛くしたるう〜！>

さすがは墓場。当然のようにゾンビが居て、こつちに向かって来た。

「うるせーよ、こつちこそ痛くしてやるぜッ！ ゴリラ代表としてなッ！」

クリス、ついに自分で認めやがった。

スタンツ――

少し助走を加え、石畳を軽いステップで蹴り、闇夜にクリスのガチムチボディが舞った。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオ――ツ！！

<あべしいいひいひいひいひい！？>

クリスの豪快なドロップキックを食らい、ゾンビがボロ雑巾のようになんて飛ぶ。

「クリス……頼むから銃を使ってくれ。危なっかしくて仕方が無い」

「すまねえ、ウェスカー。外の空気に触れた途端、オレの中で何かよく分からない……そう、“本能的なモノ”が暴れ出したんだッ！」

マズイ。クリスが明らかに野生に目覚めかけている。これはあくまでB・O・Wとの戦闘データを記録するのが趣旨であり、クリスのゴリラ化観察日記ではない。

（まあ、いい。近い内に肉弾戦ではどうしようもない相手も出るしな）

私は頭の中で今後の展開を整理しながら、クリスとジルを引き連れて雑草が生い茂った墓地の中を突き進み、少し行った所でピタッと足を止めた。

「ジル、こいつを覚えてみる」

そう言っただけは一つの墓石を指差した。その墓石には天使の絵が彫られており、天使の持つ弓矢の矢じり部分にくぼみがあった。

「『弓矢』………はっ、もしかして！」

ハッとしたジルが館の中で回収した『黄金の矢』をバックパックから取り出す。さすがだな、ジル。中々の洞察力だ。その矢の矢じりを外してだな――

――ブスリッ！

「………おい、ものすごく痛いんだが……」

何を思ったのか、目の前のクソアマは私の脳天に矢を突き刺しやがった。もちろん、血が出る。ピュ………ってなってる。ピュ………って。

「えッ、違った？ 矢でダレかをやっちまえば、天使が降りてくるっていう流れじゃないの？」

平然と言っただけやがった。「ダレか」って……オマエ、全く迷うことなく私に突き立てたよな？ なんか私の事嫌ってる？ プライヴェートとかで気に入らない事でもした？

「い、いいか……この矢の矢じりを外して、墓石にあるくぼみにはめ込むんだ。そうすると……」

ゴゴゴゴゴゴオオオオオオ――

墓石が重厚な音をたたせながらスライドし、そこに地下へと続く階段が現れた。

「す、すげえ……よくこんな仕掛けが解ったなあ、ウェスカー！」
理科の化学実験している小学生みたいに、私の後ろでクリスが驚いている。

「地下室の開閉にこんな仕掛けを施すなんて、この下はカナリ怪し

いわね」

ジルが息を呑んだ。

「ああ、その通りだ。油断するなよッ」

我々はチラチラと揺れている淡い灯りが差してくる地下へと下りる。そこは墓場と同様に石畳になっており、壁も天井も大きさがまばらなレンガや石で造られていた。

カタカタカタ……カタカタカタ……

天井から吊り下がった大きな鎖が動き、滑車や歯車が回っているような音が響いている。何かを作動させるための造りなのだろうか？ 壁には暖炉のようなモノがあつて、その中の炎が周囲を不気味に照らし出していた。

「一体……何なのよ、コレって？」

「イヤな寒気がしだしたぜ……ブラヴオーチームの連中、無事だといいいんだが」

ジルとクリスの懸念はもつともだった。むやみにデカイ洋館だけならまだしも、こんな目的不明な地下室を墓地の下に造るようなヤツが館に居るとすれば、明らかに尋常な精神の持ち主ではない。

「二人とも、アレを見てみる」

私が地下室の端っこ辺りを指差して言う。そこには円形状のテーブルみたいな石碑があつて、その表面にあるくぼみに一冊の『本』がはまつた。

「コレって……“呪いの書”って書いてあるわよ」

ジルが思わず眉をひそめた。

「何かの手がかりになるかもしれん。回収しておこう」

そう言つて私はその本を手に取り、何気なく裏表紙を見てみた。

「ジル、こんなモノがあつたぞ」

本の裏には簡単な造りの金具が付いており、そこに1本の鍵がはまつていたのだ。もちろん、この仕掛けも私の美的感覚が生み出した細工である。

「もしかすると、館の中で使えるのかしら？」

「かもしれん。こんな所に隠してあつたくらいだ。きっと、入られてはマズイ部屋の鍵に違いない」

「なるほど。つまり、30代独身男性の汚部屋とか、メイド喫茶の休憩室とかがあるワケね」

ジル、言いたい事はよく分からんし、オマエ……何か変なバイトとかしてないだろうな。

「お……い、こっち来てくれ！ 妙なモン見つけたぜ！」

別の箇所を調査していたクリスが何かを発見してこっちに手を振っている。そこには――

「うげえ……趣味悪う……」

ジルが毒づく。壁に埋め込まれるようにして作られた石像が四つ。横並びになって佇んでいる。それは『仮面』で、目・鼻・口に穴があいていた。

「ふむ……おそらく、今手に入れたこの本に書かれているメッセージ。コレのことだろう」

本にはこう記されている。

―― 四つの仮面、すなわち、『口無き仮面』・『鼻無き仮面』・『目無き仮面』・『三つ全て無き仮面』、全ての仮面が揃う時、災いは再び蘇る――

「災いが蘇るって……何て不吉なんだよ。オレって結構迷信深い方なんだ。こんなトコ、早くオサラバしたいぜ」

クリスが急にソワソワし始める。だが、実際のところ、この石仮面や本に霊的な由縁などない。これもまた、隊員達の観察力や分析力を試すギミックの一つに過ぎない。

「ウェスカー、あたし気づいちゃったわ」

ジルが独り言のように呟いた。

（おおッ、ついに事の真相に勘付いてくれたかッ！？）

私はサングラスを中指でクイツとやりながら、彼女の方に向き直

った。

「ここに並ぶ四つの石で出来た仮面に、それぞれ該当した仮面を装着させることによって……新しい仮面が姿を現すのよッ！」

「な、何だよ、新しい仮面って!？」

「……………」『家無き仮面』」

「ま、マジかアアアアアアアアア!？」

フフフツと微笑むジルと、完全に信じ込んだじゃったクリス。二人とも、ここはアメリカだ。安達。実はいない。ダメだ……この二人には何も期待してはいけないような気がしてきた。

一人でできるもん 【中年編】

「うっ……ううう……あ……？」

お、俺はダレだ？ ああ、そうだ……俺はバリーだ。で、ここはドコだ？ ああ、そうだ……山中の謎の洋館だ。そう、俺は仲間にほったらかしにされた上、頭上に鈍器を落下させられ、一時的に行動不能になっていたんだ。そして、またしても仲間の姿は見えず、静寂が支配する大きな食堂の中で一人ぼっち。

（勘弁してくれよ……！ メチャメチャ心細いよ……！）

バリーのウサギ並に脆弱な心臓がバクバクいつてるし、少々ヨロめきつつ辺りを徘徊し始める姿からは、特殊部隊の精鋭という社会的立場など微塵も感じられない。哀れ過ぎて全米？1の涙を誘いそうだ。

「よ……し、こうなったら行つてやる……」

男38歳、巨大な洋館内部を一人で搜索。彼にとってはカナリ重大なザ・決断と言えるだろう。

——ボタンッ！

バリーは小さい方のドアから食堂を出て、ティールームを通過（ケネスの遺体が視界に入らないよう慎重に）し、カラスの羽が散乱する鳥カゴ近くの階段を上る。そして、正面に見えるドアを開けて更にまっすぐ行った所のドアまでたどりついた。つまり、ウェスカー達とは別のルートだ。

——ボタンッ！

「……………何だよ、コレって？」

> i 3 4 6 9 8 — 3 9 6 1 <

ドアから入ったすぐ右隣に大きな西洋甲冑が飾られており、銀色の盾をかかっている。そして、その盾には文字が刻まれていた。

—— 死は全ての始まり ——

（や、やめろよオ……不吉なコト書くんじゃねえよオ……）
バリーは自分の背中にイヤな汗が伝うのを感じて、思わずコルトに手をかけた。

「お、恐れるな、俺！ この愛銃がある限り、どんなバケモンが出てきても一発で退治してやる！」

彼はそう自分に言い聞かせて、前に見える階段を駆け上がった。階段の先にはU字になった狭い廊下があつて、その廊下には……

（何だ？ 線路か？）

明らかに何かが移動するための細長い線路が敷かれている。その線路をたどっていくと、床の上に四角の石板みたいなモノが設置されていて、石板の表面には1本の『鍵』がセットされていた。だが、その石板にも文字が刻まれており……

—— 紋章を奪う者に死の喜びを ——

……とある。

（またかよ。もつと楽しそうなコト書けよな…… “この館の主人はスケベという理由で死んだ”とか）

バリーの望む楽しさの基準がよく分からない。彼はその鍵をとりあえず無視し、廊下の先に行く。突き当たりには、さっき見かけた西洋甲冑と同じモノが飾られていて、同様に銀の盾をかがけているで、またしても盾に文字が刻まれており……

—— 死こそ全て ——

「全くよオ……ここの住人はどれだけ死が好きなんだよッ！ それともアレか？ あの鍵を奪うと神の怒りに触れて罰せられるっ

て寸法なのかッ!？」

恐ろしい言葉で混乱するバリーだったが、わざわざこんな箇所を館の中に造って設置してある鍵だ。何か重要な役割を果たすモノに違いないだろう。

（よゝゝし、やってやる。神の怒りがナンだ！ 俺は特殊部隊S・T・A・R・Sのメンバーだ！ 非科学的なモンに惑わされてなるものか！）

男38歳、ついに決断の時。彼はゴクリと喉を鳴らし、石板にほめこまれている『鍵』に手を伸ばし――取り外した。

ズズズズズズズズ……………

石板が床に沈んでいき、バリーの左右の壁が一部移動する。さっきまであった廊下のスキ間が無くなり、突き当たりに飾ってあった甲冑がバリーの方に移動してきて、逃げ道を塞ぐようにして停止。

（えッ、えッ、何なのッ!？ 何が起きちゃったのッ!？）

口を半開きにしてキョロキョロするバリーに向かって、線路上を移動し始めた別の甲冑が1体。その甲冑は表面に巨大なトゲを何本も生やした丸い盾を装備し、盾の外周には四枚の大きな鎌状の刃が付いている。つまり、ジャンプして避けられるような高さじゃないし、この狭い廊下にはやり過ぎするような空間も無く、退路は完全に断たれているワケで。

「神様ッ、たあアアアアすウウウウウケエエエエエエエエエエ
——ッッッ!——」

大粒の涙と鼻水で顔をクシャクシャにしながら、中年オヤジが跪いて天を仰ぎ、非科学的な対象に祈り始める。

「懺悔しますッ！ 妻のお気に入り韓流ドラマDVDをフリスビーにして割っちゃったのは俺ですッ！ それと、娘達のオヤツのハッピー。ーンをこっそり食べてしまったのも俺ですッ！ 神よッ、どうか御許してください!——」

懺悔のレベルが微妙に低い。

ヒュンヒュンヒュンツ——

当然、甲冑の前進は止まるワケがなく、剣呑な刃が空を切るイヤな音がだんだんと大きくなっている。

「あ、そうかッ——！」

カチャ……

バリーは何かに気づいて持ってた鍵を元の位置に設置し直した。すると。

ズズズズズズズズ……

石板がせり上がり、移動した左右の壁が元の位置に戻り、退路を塞いでいた甲冑は突き当たりに後退し、彼を斬殺しようとしていた甲冑も後退して静止した。

「……………」

バリー、九死に一生を得る。彼は数十秒間の沈黙の後——

（おお……、神よ……俺にまだ生きるとおっしゃるのですね）

床にへたれこみながら、とっても幸せそうな表情でもう一度天を仰いだ。ズボンの股の間をビッチャビッチャにして。

「やっぱりダレもいやしねえ……」

玄関ホールまで戻ってきたバリーが周囲を見渡すが、仲間の姿は無かった。このままこの安全地帯で待機する方が精神衛生上は好ましいのだが、万が一、ウェスカー達に見捨てられた場合、ほぼ百パー孤独死する自信があった。だから、ここは少しでも行動範囲を広げ、仲間達と出会う可能性を高めた方が安全にこの洋館から脱出できるハズ。そういう考えに至ったバリーは——

ボタンッ！

食堂とは反対方向の部屋の扉を開き、勇気を振り絞って中へと入って行く。

「ここは……………画廊か何かか？」

中央には肩に壺を抱えた女神像が鎮座しており、周囲の壁には大

< 気をしっかり持ちやッ！ 家で待つとる女房や子供の事を考えるんやッ！ >

ゾンビみたいな呻き声を上げるバリーに対し、ゾンビは彼の手をしっかりと握りしめて励まし、電気ショックで心臓マッサージ。

「は、はうううう—— ツツツ——」

上半身をビクンツと震わせ、バリー…… またしても九死に一生を得る。

< どや？ もう平気か？ >

心配そうに見つめてくるゾンビ。

「ああ、すまない…… 君は命のお——」

パアアアアアアアアア———ン——！

ゾンビ、頭部炸裂。大量の肉片がバリーの顔面にへばり付く。

「おい、バリー！ 無事か！？」

大声とともにベレッタを構えたクリスが駆け寄ってきた。その後ろにはウェスカーとジルの姿も。

「俺、次の日曜に必ず教会へ行く。神様に祈ろうと思うんだ…… 外見は醜くても心は清いんだって……」

バリーが力無く呟いた。

ダーウィンさん、進化論が否定されました

「す、すまない……まだ体がともに動きそうにないんだ。俺はしばらくここで休憩して後から追いかけるよ」

「そうか、仕方ないな」

我々は精神的に著しく疲弊しているバリーを残し、探索を続行することにした。

「バリー、コレを」

そう言つてジルがケータイとコスメポーチを手渡す。

「コレは……？」

「回復に時間がかかるようならモバゲーにアクセスしてちょうだい。イイ暇潰しになるわ。でも、ルナ。ナにはアクセスしちゃダメよ。セクハラで訴えるわよ」

悪戯っぽく微笑んでみせるジル。

「ジル……オマエつてヤツは。ありがとう、ありがたく受け取っておくよ」

仲間との大切な絆に思わず涙腺が緩みそうになる。

「で、ポーチの中には鼻毛切りバサミが入ってるから、またゾンビに襲撃されたら喉でも突いて自害してちょうだい」

今度はマジ気味に微笑んでみせる。

「ジル……オマエつてヤツは。俺、必ず回復して自分の鼻毛を全部切つてから返すよ。もちろん、洗わずに」

仲間との大切な絆を心の中でポイツと捨てちゃう。

「よし、先を急ぐぞ」

ウェスカーが先導して先程の画廊に戻る。実はこの部屋、中央の壺を肩に抱えた女性像に『洋館1階の地図』が隠されている。が、地図は壺の中に入っており、周囲からは壺からはみ出た紙キレが見えているが……。

「クリス、あんな所に入っているくらいだ。なにか重要なモノに違

いない。なんとかして取れないか？」

私はクリスの現場観察能力を試すことにした。この部屋には隅っこに動かせる簡易棚があり、それを像の近くまで押していつて、棚に乗って地図を入手する……それがベストな方法なのだが。

「くツ、さすがに高くてジャンプしたくらいじゃ届かないぜ」

初めはダレでもそうする。問題はここからなのだ。言い換えれば、天井から吊り下げたバナナをチンパンジーがどうやって上手く取るのか——その知能テストに近い。踏み台を使ったり、長い棒で叩いてみたり。

「おい、ウェスカー！ この不自然に置かれた棚……動くぜ！」

よし、クリス。気づいてくれたか。まずは第一段階合格だ。だが、棚を使用することさえ気がつけば、後は自然と使い方は限られて——

ガシャアアアアアアアアアア

ツツツン！！

「よっしゃ、取れたッ！」

嬉々として地図を拾うクリス。コイツ……棚を持ち上げて壺めがけて投げつけやがった。思考が短絡的とかいうレベルじゃない。チンパンジーの実験を並行して隣合わせでやったとしたら、チンパンジーがクリスを見て「えッ、ちょ、マジでWWW」とかなりかねない光景だ。クリス、人類としてのボーダーラインを下回る気なのか？（オマエ……どうして特殊部隊なんかに入隊できたんだ？）

正直、疑問ではあるが。とりあえず地図は手に入った。

ガチャ——

「解錠できたわ、行きましょう」

ジルが墓地の地下室で発見した鍵を使って、開かなかったドアを開けた。その先はL字になった廊下が続いており、右側の壁には断続的に窓があつて、時々鳴り響いている雷の閃光がチェス盤のような模様の床を照らしている。

「いかにも何かが出てきそうな雰囲気じゃねえか……！」

「ああ、そうだな……特に窓の方には気をつける。どんな襲撃を受けるか分からん」

「後ろはあたしが警戒するわ」

クリスが窓の方を、私は前方を、ジルが後方へと視線を向けてゆつくりと進む。ホラーにありがちな展開としては、稲妻の閃光とともに窓ガラスが割れて――

バリーイイイイイイイイイイイ――ツツツン

！！

「うおッ、な……何事だッ!？」

続けざまに二枚の窓ガラスが派手に砕け散り、そして――

「わんわんおオオオオオ~~~~!!」

> i 3 4 6 9 9 ― 3 9 6 1 <

稲妻の閃光を纏って、それぞれの窓から一体ずつゾンビ犬が飛び込んできやがった。

「くそッ、挟み撃ちかよッ！」

クリスが慌ててベレッタを構えたが、照準を合わせるよりも早く連中は駆け寄ってきて、彼の腕にガツチリと噛みついた。

「ボクの名前は『太郎』、栄えあるゾンビ犬一族の優秀な戦士なんだおッ！」

噛みつきながら自己紹介してくれた。そして、もう一匹の方は――
「くッ……ちよつと！ 離しなさいよッ！」

ジルの脚にこれまたガツチリと噛みついちゃってる。

「ボクの名前は『次郎』、兄の太郎とともに一族の幹部を目指す若きエースなんだおッ！」

どうやら兄弟のようだ。ゾンビ犬社会の事情とかは知ったことで

はないが、コイツ等は山中で襲ってきた連中よりずっと攻撃的で、強い。

「クリス！ ジル！ なんとか振りほどけッ！」

ゾンビ犬が飛び込んでくる事態も私の想定内。この不意打ちをどう乗り切るのか……さあ、二人とも見せてもらおう。

——ガブリッ！

「い、痛いんだお……！ こんな反撃は考えてなかったお！」

「どほはッ、はひっははッ（どうだ、まいったか）！」

見たままをコメントしよう………クリスがゾンビ犬に噛みついていて。背中にガツチリと。

（もうよすんだ、クリス！ 両親が見たら号泣するような光景だぞ！）

正直、直視できるレベルではない。人としての尊厳とは、これ程までに簡単に崩壊するものなのか？ あるいは彼が特別なのか？

「で、ジル………オマエはどうなってるんだ？」

「え？ 別に。特に不自由はないけど」

太ももに噛みつかれたまま、彼女は事も無し気に言う。

「いや、その………痛くはないのか？」

「うん、まあ、程良く痛いけど。無理に引きはがすのも面倒だし」
面倒？ 晩御飯の献立を決めるような軽いノリで言うなよ。犬一

匹が太ももからブラ下がつて、『ジル+ゾンビ犬』で別の生物兵器が出来上がってるよ。

「な、何だおッ………！ ボクの体が急に痺れて……きた……おッ」

ジルに噛みついていた次郎が、突然、ポトリと床の上に落ちた。
四本の脚をピクピクさせ、口からアワを吹き始める。

「何事だおッ！？ 弟よ、しっかりするんだおッ！」

太郎がクリスへの攻撃をやめ、倒れた弟のもとに駆け寄ってその体をペロペロと舐めてやる——と。

「は、はうッ——な………何が、起きた……んだ………お？ ボクの……体が……けふッ」

パタッ――

兄の方も床の上に倒れ伏してしまった。

「おッ、何かよく分かんがオレ達の勝利みたいだな。所詮はイヌところ。人間様に太刀打ちできつかよ！」

ケンカに勝ったクソガキみたいにはしゃぐクリス。

「……ちよつと、アンタ等どうかしたの？」

ジルの方はどうも釈然としないので、仲良く寄り添って痙攣している二匹に声をかけてみる。

「ぼ、ボク達の体が……新種のウイルスに……お、侵された……おチ~~~~ン……」

太郎・次郎、戦死。

「ジル、オマエ一体……！？」

私は思わず身構えた。次郎はジルに噛みついて急変し、その次郎と接触した太郎が同様に急変して倒れた。もしや、既にジルはT・ウィルスに感染していて、彼女の体内でウイルスが突然変異を起こし、B・O・W・ですら昏倒させるような毒素を有したモノとなったのか？ 生物学上の可能性としてはありうるが、まさか……。

「ジル、体に妙な違和感とかは？」

肩に手をポンツと置いてきたクリスが、ジルを真剣な目つきで見つめる。

「平気よ、別に何とも無いわ」

強がってみせるジルだったが、隠そうとする焦燥感がわずかに顔色を変えている。

「そうか。けど、辛くなったら真っ先にオレ達仲間を頼れよ」

「クリス……ええ、そうさせてもらっわ」

ジルが照れ臭そうに呟く。

「ウェスカー……一応、オレなりに考えてみたんだが」

「ほう、何だ？」

「さっきのイヌところ、“新種のウイルス”に侵されたって言うてやがった。それはつまり――」

野生丸出しの勘が、この事件の裏側に潜むＴ・ウィルスの存在を感知したのか！？

「ジル、オマエの病名は『ビッチ』。残念だが……現代医学ではどうしようもない」

ビシッとクリスが指差して断言。カッと光った稲妻の閃光をバツクに背負いながら。

「そ、そんなあアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア——
——ッッッ！？」

ムンクの叫びみたいに溶けるジル。

「……………」

私はそんな小芝居を無視して瞑想し、文字通り犬死にした二匹のゾンビ犬をとむらってやった。迷わず天国へ逝けますよ……に。

鉄骨が足りないから耐震偽装！？ 違う、エコだ！

「よし、クリアだ」

我々はゾンビ犬からの襲撃を受けた廊下を突っ切り、突き当たりのドアを開けて別の廊下に出た。そして、正面に見える部屋のドアを開けて中に入る。

「ここは……ふむ、浴室のようだな」

少々薄汚れた感じの床と壁。洗面台には小物が散乱し、光沢を失った鏡が私の姿をボンヤリと映し出している。

「うわッ、汚いわねえ……バスタブの中に泥水みたいなのが溜まってるわ」

ジルが壁際に設置されたバスタブの中をのぞきながら顔をしかめる。

「うーん、トイレの方は特に変わった所は無いな。消臭力のイイ匂いがするし」

クリスが隅っこの洋式便器を眺めて言う。消臭剤に関しては、私が後から設置した心ばかりの演出だ。ちなみに、ラベンダーの香りだ。

「ジル、そのバスタブの水を抜いてみる」

私が彼女に指示を出す。そう、このバスタブの底には汚水に隠れて見えないが、一本の『古びたカギ』が落ちているのだ。そのカギでないと開けられないドアがこの浴室の近くにある。

「この汚いヤツを？ 何でよ？」

その疑問は最もだ。

「ジル、よく考えてみる。この館の状況は明らかに尋常ではない。このまま仲間の探索を続けるのなら、わずかな手掛かりも見逃せない。もしかしたら、仲間の一人が我々のようにここに来て、何か落としていったかもしれん。要はしらみつぶしだ」

「なるほど……ええ、分かったわ」

ズゴゴゴゴゴオオオオ——

バスタブの脇についていたレバーを操作すると、真っ黒な汚水が流れ出して水位がみるみる低くなっていき——

ザバアアアアアアアアアア—— ツツツン

！！

<ぶっはあああああああああああああああッッッ！>
汚水を辺りに飛び散らせながら、中から一体のゾンビが起き上がってきた。

<こんのクソボケがあゝゝ！ めっさ遅いやないけゝゝ！ ここまで来るのにどんだけかかつとんねん！？>
いきなり不機嫌そうだ。

<こつちがバスクリンのカクテル湯に気持ちよう浸かつとつたら、遠くの方から人の声が聞こえてきたんで、湯に潜つといて驚かしてやろうと待ってたんやッ！>

コイツ……どんな入浴剤の混ぜ方したら、こんなドブみたいな色になるんだよ。

<あんまり時間かつとるもんやから、危うく窒息死するところやったわ！ まあ、ええわ。なあ、折角やし、姉ちゃんも一緒に入らへんか？ 肩こり・腰痛・神経痛・リウマチ・水虫なんかによつ効くんやけど——>

——パンッ！

ジル、鬱陶しくなつて一発撃つ。

<ぎ、残念や……生理不順は治せへんわあ………ぶへッ>
ゾンビ、バスタブに沈む。

「おッ、底の方をしてみる。何かあるぞ」
そう言つて私が指差してやった。

「何かの……カギか？」

クリスが拾い上げて小さく首を傾げている。

「よし、もうこの浴室に用は無い。出るぞ」

我々は入浴剤で健康を保とうとする意味不明なゾンビを倒し、この浴室に来る手前にあったドアの前まで戻った。

ガチャ……

「よし、開いたぜ」

バスタブで入手した力ギを使ってドアを開ける。その先は……

「また外かよ」

またしても淀んだ夜空が目に入ってきた。そこは石畳のし字になった廊下で、周囲を非常に背の高い鉄柵が囲っている。鉄柵の向こう側は雑木林になっていて、柵のスキ間から尖った枝や葉っぱが入り込んでいた。

「コレは……『除草剤』かしら？」

突き当たり近くまで行っただけで、ジルが地面にポツンと落ちていた袋を発見する。実は、この『除草剤』も館の攻略には必須のアイテムで、私は彼女からソレを預かってバックパックにしまった。
> i 3 4 6 2 8 — 3 9 6 1 <

「何だこの空間……何にも無いぞ」

クリスとジルが不思議そうに四方を見つめている。我々はさっきの浴室の前を通過し、左右にそれぞれドアがある箇所までたどり着き、まずは左のドアから入ったのだが……そこは立方体の箱の中みたいな部屋。いや、『空間』になっていて、四方の壁一面に穏やかな色調の絵が描かれている。当然、私はこの不自然な空間に仕掛けられたギミックを把握しているが、そのギミックを発動させるためには、この空間にあるもう一つのドアから先にある部屋へと移動せねばならない。

ボタンッ！

「ここはゲストルームか何かか？」

壁際には火のついていない暖炉。中央に木製のテーブルと、黒の皮張りのソファ。そして、暖炉の向かい側の壁に飾られた大きな絵から、金属製の取っ手が二つ飛び出していて、その取っ手には――

「ウェスカー、戦力の補充といこうぜ」

クリスが少し嬉しそうに、絵に設置されていた物体を指差して言う。

『ショットガン』。レミントンM870。散弾を発射する武器で、広範囲に弾をばら撒くため複数の対象を同時に攻撃できるが、距離による威力の減衰が大きい。近距離から撃てば、ほとんどのゾンビを一撃で倒せる12番ショットシエル使用タイプ。

ガコンッ……

クリスが嬉々としてショットガンを取っ手から外して手にしたが、その行為により、私が丹精込めて造り上げたトラップの一つが作動した。

（フフフッ、さて……次の局面をどう切り抜ける？）

サングラスで隠れた私の目は完全に笑っていた。館の廊下に戻るため、さっきの不自然な空間を通過しなければならないのだが――

――ガチャッ！

「んん？ なんの音だ？」

我々がその空間に戻ると鍵が閉まるような音がし、直後……

ガタガタガタッゴトゴトゴトッゴゴゴゴゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

「なッ、ななななななッ――何だよこりゃ！？」

空間全体を揺るがす振動とともに、重厚な音が頭上から聞こえてくる。

「マズイ、天井が下がってきているッ！ このままでは押し潰されるぞッ！」

私はわざと恐怖を煽ってやった。天井にはペンキで殴り書きしたみたいに、*“Kill you”* って書かれてるし。そう、この吊り天井トラップは私が姉。建築に委託して施工したモノだ。さすがは。歯建築、イイ仕事をしてくれる。

「ダメだわッ、廊下へのドアにカギが掛っついていて開かないッ！」

ジルがドアノブを握りしめて顔色を変える。

（さあ、二人とも、この非常事態をどう切り抜ける？ ベストな正解は、ゲストルームに戻ってショットガンを元の場所に返し、トラップをリセットする。そして、館の別の部屋にある『壊れたショットガン』と交換することにより、トラップを発動させずショットガンがはじめて手に入る。この一連の作業に気がつくかな？）

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ツツツン！！

「よし、開いたわ。楽勝ね」

「さすがはジル！ 強行突破の天才だぜ！」

「……………は？」

ジルがクリスからショットガンを奪い取り、ドアの鍵を散弾でブチ抜きやがった。

（えッ、ちょ、オマエ等ッ——！）

完全に想定外だったこの展開に、私は呆気にとられて立ち尽くしてしまふ。と、とにかく二人の後を追わないと。ここにいたら、仕掛けた当人だけが間抜けに潰されるなんて事態に…………。

ゴゴゴゴゴゴオオオオオオオ——……………ゴゴッ…………

ゴ…………

「…………おい」

吊り天井、停止。どうやら誤作動が起きたようだ。さすがは耐震強度不足を売りした建築事務所、自らが機動したその振動でシステムにエラーが起きちまってる。私は天井から降ってくるホコリはらいながら、もう一度天井を仰ぎ見た。

——“青春を 全力逆走 24時”——

意味不明な文字に変わっていた。

鉄骨が足りないから耐震偽装！？ 違う、エコだ！（後書き）

読者様へのお詫び

この作品における挿絵が案の定、版權に抵触しちゃったようで……運営に殆ど削除されちゃいましたWWW。この件は無念ではありませんが、作品がより多くの人間の目にとまっと思っていると思えば救いかな？

箱の中に大山の。代は居ませんでした

非常に釈然としないのだが、ショットガンが手に入って我々の公式戦力が強化された。

「おッ、ここにも何かの部屋があるぜ」

少し先に行った所で二階へと続く階段を発見したが、その手前でクリスが立ち止まって一つのドアを指差している。

（ここは……よし、ここで物資の交換と補給をやっておこう）

実はこの部屋——私にもよく分からない仕組みの物体が設置されているのだが……。

ボタンッ！

「ここは……物置かしら？」

ジルが薄暗く少々狭いその空間を見回す。床の上には木箱がいくつが散乱し、脚立や段ボール箱もある。壁に造られた簡易棚には、工具のような物が所狭しと並べられていた。

「ん？ こりや何だ？」

クリスの足に小さなボトルのような物がぶつかって転がった。そのボトルを拾ってみると、何とも御丁寧に『携帯用燃料ボトル』と書いてあった。

「多分、コイツの中身を入れて持ち歩くための物だろう」

私は床の隅に置いてあったポリタンクを持ち上げて言った。

「ガソリンか？ けど、屋内でそんなモン持ち歩いてどうすんだ？」

確かにこればかりはヒント無しでは気づきようがない。

「コレ見て。ダレかのメモ書きみたいなのが落ちてるわ」

そう言ってジルが一枚の紙キレを拾い上げた。そこにはこう書かれていた——

——【死体処理に関する諸注意】・あの化け物どもに関する真実が判った。奴らは死体になっても復活するのだ。ただ、対処方法が

ないわけではない。奴らを復活させない方法は2つある。？死体を燃やす。？頭部の破壊。生きる意志のある者の為に、この洋館の1Fにオイルを用意しておいた。それぞれで、必要な分だけ持つていて、生き残る道具として使って欲しい。追伸：着火する道具くらいは、自分達でなんとかしてくれ！――

「おいおい、これってまさか……今まで倒してきた『ゾンビ』とかいう連中が生き返るってハナシか？」

クリスが思わず息を呑んだ。

「とんでもない館ね。しかも、このメモの内容から察するに、結構前から館内がこんな有り様になってるようね。ゾンビではない正常な人間が居て連中と戦っていたとなれば、これは完全に事件よ。住人の搜索や仲間の搜索の前に、あたし達の身の安全も危ういって気がしてきたわ」

バイオレンスなメモの内容から、この洋館を蝕んでいる脅威の大きさを察知したジルが、早速、クリスからボトルを奪い取ってガソリンを入れ始めた。

「ところで、ウェスカー。このやたらとデカイ金属の箱は何だと思っ？」

クリスが壁際にポツンと置かれた直方体の物体を指差し、私に問いかけてきた。そう、その箱こそがこの洋館におけるシステム不明要素の一つ……『アイテムボックス』なのである。このボックスは複数存在しており、中に収納したアイテムが別の場所のボックスからも取り出せるという、四次元仕様になっているのだ。仕組みは全くもって不明だが。

――グウォンツ

「おそらく、武器や道具を一時的に預けておける便利な収納スペース……とでも言うべきかな？」

上手く説明できない私は、ボックスの蓋を開きながら適当に切り返した。

「ふゝん……けどよう、大切な装備とかを預けちまったら、またここまで取りに來ないといけないってワケだろ？　なんか面倒臭いなあ」

ああ、そうだ。普通はそう考える。が、このボックスは四次元仕様で………って、どう説明すればいいのか。まあ、とにかく、現状で不要なアイテムを中に置いておこう。

「えッ、ちよつと……ダレかいるわよ」

「——は？」

横からボックスの中をのぞいてきたジルが、ボックスの中の薄闇に何かを発見した。

<うふうウウゝゝ　　ぼゝゝく、ドラ——>

——ボタンッ！

ウェスカー、慌てて蓋を閉める。

「……………どうかしたの？」

ジルが怪訝な顔して私を眺めている。今のは何かマズイような気がした。よく分からんが、ものすごくメンドーな展開になる予感があったため、我々は早々にこの部屋から立ち去ることにした。

「いいか、さっきのは早めに忘れておけ。ダレも中にはいなかった………そう、ダミ声を出す二頭身のロボットも、アルカノイドが異常に上手いオバサンも中には居なかった。そういうコトだ」

「何言つてんだよ？　大丈夫か？」

クリスが燃料ボトルをバックパックに仕舞いながら首を傾げてる。

ギシギシ……ギシギシ……

我々は階段を上って二階へ移動。横に伸びる廊下の右方向へと進み、墓地の地下室で発見した鍵を使って先にあるドアを開ける。すると、また横に伸びる廊下に出た。今度も右方向へ進み、何かの部屋のドアを発見。鍵はかかっておらず、我々は中へ。

「ここは……館の住人の個室かしら？」

部屋には木製の椅子やテーブル、使えるかどうか分からない蓄音器や、大量の書物が並べられた本棚などがランプの淡い光に照らされている。

「ウェスカー、妙なモンを見つけたぜ」

そう言ってクリスがドアのすぐ側の簡易棚に、ランプの光を反射している物体を発見した。それは――

「こいつは『犬笛』だな」

そう、このアイテムもまた、搜索続行のための重要アイテムなのだ。で、犬笛と一緒になにやらメモ書きらしきモノも。

―― 今日、スペンサー卿に呼ばれて、「あるもの」を誰にもわからない所に隠せといわれた。色々考えた結果、僕はあるアイデアを思いついた。それは、あの凶暴な飼い犬に守らせればどうだろうか？ ということだ。あの犬はいつもお気に入りの大食堂2階の西テラスにいるし、あそこで君の持つ犬笛を使えば、いつでも呼出せるじゃないか。そこで君にお願いがある。あの犬は君にだけはなついている。どうか君の手であの犬に、この首輪をつけてはもらえないだろうか？ この首輪には、スペンサー卿から渡された「あるもの」が隠してある。君は信用できる奴だから、君に頼みたい。このお礼は必ずさせてもらう。君が前に欲しがっていた例のものが、ツテで手に入りそうなんだ。それでどうだろうか？ すまないが、よろしく頼む。【ジョン・トールマン】――

「クリス、ジル……どう思う？」

私は神妙な声で二人に問う。

「きつと、初回限定版のDVDボックスだな」

「いいえ。多分、超高性能のラブドールに違いないわ」

メモの後半部分を追究してどうする。

「いや、そうじゃなくてだな……この『犬笛』の使い道を検討して

欲しいんだが」

「要するに、コイツを吹けば犬がやってきて、オレ達がなんかこう、楽しく愉快的カンジの画になるってワケだろ？」

クリス、どうしてオマエの思考回路はムツゴロウさんとシンクロするんだよ。

> i 3 4 9 0 1 — 3 9 6 1 <

ボタンッ！

「さて、ここで使ってみよう」

我々は墓場の地下室で入手した鍵と古びたカギを駆使して、メモ用紙に記してあった大食堂二階の西テラスまでやってきた。今のところ、メモにある凶暴な犬とやらの姿は確認できない。

「ジル、吹いてみる」

「ええッ、こんな所で！？ もうっ、ウエスカーったら顔に似合わないイヤらしいわねえ」

「……………犬笛をだ」

「はいはい、分かってますって」

ジル…………どこで覚えたのかはあえて聞かないが、オマエの下ネタは微妙に分かりにくい。

スウウウウウウウウウ——ッ

ジルが思いつ切り息を吹き込むと、人間の耳には聞こえない周波数の音が発せられる。

「ん？ ……………気のせいかな？」

約一名、ゴリラがちょっぴり反応しているが。

ジャラン、ジャラン、ジャラン——！

「来たなッ」

首輪に繋がった鎖を引きずりながら、どこからともなく出現する

ゾンビ犬。今までの連中より一際凶体がでかく、軽やかな身のこなし。我々はこの敵を迎撃し、先に進まねばならないのだ。
<わんわんお~~~~ッ!>

夜の帳に鳴き声が木霊した。

オマエを殺してオレは死なん

<ボクの名前は『パトラッシュ』！ ゾンビ犬一族の頂点に立つ、
とっても偉いわんわんだおッ！>

「来やがれ、犬畜生がッ！」

犬笛の音色に誘われて、大型のゾンビ犬が一匹……闇夜から舞い降りてきた。

「クリス、この犬に間違いない！ 首輪に何か光るモノが見える。
メモにあった“あるもの”が装着されているハズだ！」

私はゾンビ犬が逃げないよう、ジルと共に逃げ道に立ち塞がった。
「テメーに恨みはないが、仲間の搜索に役立つアイテムを持っているからには――」

パンッパンッパンッ！！

クリスがベレッタを連射し、全弾命中。腐敗の進む肉体を穿った。
だが、敵の向かってくる勢いは衰えず、その大きな図体を覆いかぶせるように襲いかかる。

<天国へ旅立った『太郎』と『次郎』の仇、ここでとらせてもらうんだおッ！>

異臭を放つ禍々しい口が大きく開き、ヨダレで濡れた剣呑な牙が光った。

「やかましいッ、オレは猫派なんだよッ！ テメーなんぞはすぐに仲間の後を追わせてやるぜッ！」

噛みつかれまいと、相手の首とアゴをつかんで抵抗するクリス。
だが、完全にマウントポジションをとられている上、クリスの腕力でも容易には押しのけられないパワー。

「ぬッ……ぐう……こんちきしょおおおおおおおおお
おッッッッ！！」

ブンッ――！！

クリスは両手でゾンビ犬の首根っこをつかみ、渾身の力をこめて

投げ飛ばした。が……

< 甘いんだおツ！ >

寝転がった状態からの投げのため、どうしても勢いが半減しており、パトラッシュは器用に壁を蹴って空中でクルリッと一回転し、起き上るクリスの前にスタンと戻って構え直す。

「くそッ、さすがにデカイ口をただけのことはあるぜ………
つて、ヤベッ！」

さっきの攻撃でベレッタが手から離れ、あろうことか、敵の背後に転がっているではないか。

「クリス！ どいて！」

「ジル！？」

パアアアアアアアア——ン！

クリスが反射的に地面を蹴って真横に跳ねた直後、ゾンビ犬めがけてジルがショットガンをブツばなす。

< 無駄なんだおツ！ >

相手の行動を先読みしたかのように、大きく跳躍して散弾を全て回避してしまう。

「コレならどう！？」

——ヒュッ

クリスのバックパックからバナナをつかみ出して投げる。

< 美味しくいただくんだお—— >

モシヤモシヤ……

空中で食いついてごちそうさま。

「ならコレは！？」

ポ——イ……

またしてもバナナが投げつけられ——

< 同じコトなんだおツ！ >

パクッ——

フリスビーに食らいつくみたいに、反射的に空中でダイビングキヤッチ！ だが、しかし……

<はもオ？　こ、コレは——！？>

今度もムシャムシャしてやろうと得意げなパトラッシュだったが、己が食らいついたモノの異常に気づいて動きが止まる。

「フッフ、おバカなワンちゃんね♪」

クスクスと不吉な微笑みを浮かべるジル。彼女の手には“自爆ス
イッチ乙”と書かれた物体が。

<し、しまったおッ！>

パトラッシュが食いついていたのは、色だけ同じのバナナのヌイ
グルミ。やたら大きいんだから食いつく前に気づくべきだが、そこ
は悲しきケモノの性。御主人様が投げた物を啜えて拾ってくるのが、
どうしようもない習性。

「あの世でネロが待つてゐるわよ」

カチッ——

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ

——
ツツツン——！

ヌイグルミ、BA KU HA TU。

「ああ——　ツツツ——！　オレの『ミラ・ジョヴオヴィッチ』

があ——　ツツツ——！」

悲痛の雄叫びをあげるクリス。オマエ……ネーミングセンスがひ
ど過ぎ。

ドサッ……

頭部が破裂し、胴体が黒焦げになったゾンビ犬の亡骸が地面に転
がった。

「ふう、なんとか撃退できたようだな」

方法はカナリ強引ではあったが、我々はパトラッシュが装着して
いた首輪を手に入れ、その首輪に隠されていた『鍵のイミテーショ
ン』を発見する。

「畜生ッ、何て事しやがんだよ、ジル！　アレは妹のクレアから貰

った、とっても大切なヌイグルミだって言っただろ！」

> i 3 5 1 3 5 — 3 9 6 1 <

「あたしにはヌイグルミの苦悶が聞こえていたわ……毎晩、野郎の抱き枕にされ、汗臭くなって皮脂汚れにまみれたミラ・ジョヴォヴィッチの声。そう、聞こえていたから安らかに成仏させてやったのよ！」

そう言つてビシツとクリスを指差す。

「そ、そうだったのか……！　オレがミラのことを苦しめていたなんて……ごめんよ……！　いつかあの世で出会えたら、力の限り洗濯してやるからなア……！」

夜空を仰いで涙ぐむバカが一匹。

「よし、先に進むぞ」

『鍵のイミテーション』を入手した我々は、館の三階にある西洋甲冑があちこちに飾られた場所でトラップを作動させ、先程手に入れた鍵のイミテーションを使ってトラップをリセットする。これにより、また新しい鍵が手に入った。前回の墓場の地下で見つけたヤツには『剣』の模様が刻まれていたが、今度のは『鎧』の模様が刻まれている。この模様は何か意味があるのか？　それとも、この住人の単なるオシャレ感覚か？　後者だとすれば、あえて言おう……カスであると。

その後、一階の大食堂まで戻った我々は、暖炉の真上の壁にはまっていた怪しい『エンブレム』を外し、クリスが落下させて叩き壊れた石像の傍まで行つて、『青い宝石』を回収する。ついでに、バリ―が書いた血文字のダイニングメッセ―ジをさり気なく消しておく。口笛吹きながら、三人で協力して足でゴシゴシする。この時、初めて三人の心が一つになったような気がした。

——バタンツ！

「よし、次はこっちだ」

玄関ホール二階の中央から、『鎧』の鍵を使って開いたドアの先——そこは、細長い廊下が続くテラスになっていた。またしても我々の肌に、瘴気とでも言うべき不吉な空気が絡みついてくる。

「むッ、
ダレかいる……！？」

私は足を止め、少し先に見える木製のベンチを直視した。ベンチに佇むその姿は――

「なんてこった……フォレストじゃねえか！」

クリスがその名を叫んで立ち尽くした。『フォレスト・スパイヤー』——29歳。血液型・A型。身長183センチ。体重71.1キログラム。電腦犯罪・整備担当。プロ意識が強く、チーム内での信頼も厚い。射撃能力も高く、クリスと1、2を争うほど。クリスやジルとは入隊以前からの仲である。

「体中傷だらけよ……きつと、この館内を徘徊しているバケモノ達にやられたのね」

ジルがフォレストの状態を観察しながら呟いた。彼は精根尽き果てたかのようにベンチに腰かけており、ここに至るまでの闘いの凄まじさを物語っていた。そして、彼の遺体のすぐ傍には、愛用するグレネードランチャーが転がっている。「グレネードランチャー」。榴弾を発射する武器で、炸裂弾・硫酸弾・火炎弾の3種類の弾丸が使用でき、いずれも高威力。

「フォレスト……まさか、こんな形で再会することになるなんてな。コイツは形見としてオレが貰っておこう」

そう言うってクリスは悲しげな面持ちでランチャーに手を伸ばす――
が。

「いかんッ、離れるんだ、クリス！」

私は叫んだ。死んでいるハズのフォレストの指先が、ピクリと動いたのが見えたからだ。そして――

[illegible]

!!>

ゾンビ化して復活。しかも、今までのゾンビとは様子が違う。皮膚の所々が赤く変色し、両手の指先から肉食獣のような長くて鋭い爪が生えている。

「くッ……やるしかないってワケ!？」

「ああ、そのようだ」

ジルがショットガンを構え、私はベレッタの照準をフォレストの頭部に合わせる。

<往生しいやあああああああ—— ツツツ!>

一度殺された仲間をもう一度葬る……そんな過酷な闘いが始まった。

て彼に馬乗りになり、館内で拾った『閃光手榴弾』を大きく開いた口へ投入。

<はもはもッ！ ふもオオオオオオオオ！？>

ズパアアアアアアアアアアアアアアア
——— ツツツ
ン！！

数秒後、フォレストの頭部が弾けた。辺りに汚い血肉を撒き散らしながら、同僚……滅びる。

（なッ、ちょ……いくらなんでも容赦なさすぎじゃないかッ！？）
あまりに手際の良い一連の共同攻撃に、私は思わず呆け顔になってしまう。

「ふう、スッキリしたぜ」

「ええ、あたしも」

ええッ、何なの！？ その一仕事終えた後の壮快感あふれる二人の表情は！？

「このクソ野郎……以前、オレの妹を紹介した時、その日の内にナンパしてきやがった。とんでもねえカスだったぜ」

「あたしなんか、署内で幾度となくセクハラを受けたわ。持ってたハンカチのペイズリー柄をパイズリー柄とか言い出すし、“尻を撫でるのに理由がいるのかい？”とか言いながらタッチしてくるし……

…ぺっ（怒）！」

憤怒の目で見下ろすクリスと、ツバまで吐きかけるジル。もうなんか、私の勤務先ってヤダ……。

「片付いたようだな。よし、先を急ごう」

折角の性能テストだったが、二人のヤル気がみなぎり過ぎてあまり参考にはなりそうにない。形見のグレネードランチャーを回収し、次のエリアへ向かうことにした。

その後、我々は今持っている全ての鍵を駆使し、鹿の剥製が壁に飾ってある部屋に入り、左側のドアを開けて中へ。壁中に昆虫の標本が飾ってある部屋で仕掛けを解除し、『ウインドクレスト』なる物を手にする。ちなみに、クリスは一人で剥製の鹿に喋りかけていた。色んな意味で怖かったので、あえて会話の内容は聞かなかった。『ウェスカー、この館は昔より住みにくくなったそうだぜ』

「……………そうか」

住宅事情を気にする鹿の剥製ってナニ？

カチャ――

「入るぞ」

『鎧』の鍵を使って入った今度の部屋は――明らかに何だかのトラップが仕込まれたスペースだった。無機質な空間の左右に西洋甲冑が数体並んでおり、侵入者を殲滅したくて仕様がな……そんな妖気を纏っている。

「ここは私に任せろ」

そう言っただけ私は甲冑達を正しい順番で押し、トラップをリセットした。もし、間違った順番で押してしまうと、毒ガスが吹き出してきて非常に危険な状況に陥ってしまう。これまでの二人の言動から察するに、クリスとジルにやらせてはマズイ。甲冑を破壊したり、毒ガスが充満した部屋の中に私一人を閉じ込めてみたり……そんな暴挙にでる可能性がある。

「よし、アイテムを手に入れたぞ」

宝宝箱に入った『目鼻口が封じられた仮面』を発見。そこで私は二人に指示を出した。

「ここから先は別れて探索を続けよう」

「え、どうしてよ？」

当然、ジルは訝しがる。

「怪しいアイテムがこれだけ手に入るということは、この館の構造は予測していたのよりずっと複雑だ。このまま一団で行動しては無

事な仲間と出会える確率が低くなるし、アイテムの回収にも余計な時間を要してしまう」

「なるほど。で、どう別れるの？」

「私とジルで一階を。クリスが二階を搜索してくれ。ただし、クリスは見たことの無いモノを発見したら、必ず一階に戻って私に報告を。勝手にアイテムを使用したりするなよ」

「ああ、任せてくれッ」

ものすごく頼もしい笑顔で切り返してきたが、完全に初めてのオツカイに出される子供的な扱いだ。

「気をつけてね、クリス」

「そっちこそな」

軽く笑顔を交わして別れるジルとクリス。このタイミングでの別行動がどのような結果を生むのか、この時点では私にも予測できない。

「さあ〜って、ここのドアから行ってみるかな」

一人で遠足に出かけるようなノリで、クリスは鍵を使って中へ。

そこはL字の廊下で、廊下の曲がり角にはなんと――

「おッ、オマエは……レベッカか!？」

「あッ、クリス先輩!」

一人の女性隊員が床の上に座り込んでいた。『レベッカ・チェンバース』――18歳。血液型・AB型。身長161センチ。体重42・1キロ。衛生担当。化学知識に優れ、18歳にして大学も卒業済み。マイペースな性格。赤いバンダナを愛用している。

「おいおいッ、リチャードじゃねえか!」

駆け寄ったクリスが目にしたのは、レベッカに膝枕されて息も絶え絶えの男性隊員。体中から出血し、顔面蒼白。明らかにヒドイ有り様だ。『リチャード・エイケン』――23歳。血液型・AB型。身長172センチ。体重62・5キロ。通信担当。陽気な好青年。人情の機微を読むことに長けており、年齢も近いことからレベッカ

の指導役として行動した。

「ク、クリス……この館はヤバイ……早くここから出るんだ。とんでもないバケモンが……いるぜ……うぐッ」

「バケモン？ ゾンビや犬っコロのことか？」

「いいえ、違うっス。毒蛇に咬まれたみたいなんスけど、その傷口が信じられないほど大きくて……」

レベツカの口ぶりだと、どうやら新しい敵の登場のようだ。

「“アイツ”は毒蛇なんてモンじゃねえ……あれはまさしくバケモンだッ！」

「『血清』が必要っス。けど、別の部屋に置いてきてしまつて……」
単独行動を始めた途端に難関任務が発生した。

「よしッ、任せろ。オレが行こう」

クリス、安いヒーロー精神が発動。

「急いでください……そうはもたないっス。血清は一階食堂の北西にある個室っス」

「ああ、待つてろ。すぐ戻るッ！」

そう言つて飛び出していくクリス。これまではウエスカーの先導があつたので、洋館内で迷う事は無かつたが、今回はクリス一人。幾度となく部屋を間違えつつ、蘇ったゾンビ共を葬りつつ、なんとか目的の部屋に到着する。

「……………どれだ？」

部屋の中にはデスクと椅子、小さめのベッド。それに、薬や化学薬品が大量に並んだ棚があつた。クリスは棚の前に立ち、アゴに手をあてて普段は決して使用しない脳ミソをフル活用しはじめる。

【棚の中身】Ⅱ消毒液・クロロホルム・硫酸・塩酸・血清・正露丸・ウスターソース・アニメDVD（プ。キュア）……等々。

「よし、分かん時は全部持つていきやあい。うん、そうしよう
ッ！」

クリス、棚に並んだモノを手当たり次第にバックパックへ放り込む。果たしてこの行為がどのような結果を招くのか……。

パンツが見たいんじゃない！ パンチラが見たいんだ！

私とジルはクリスと別れた後、一階のまだ探索が済んでない箇所へ鍵を駆使して入っていく。壁に幾つかのステンドグラスが並んだ部屋で仕掛けを解除し、『口を封じられた仮面』を入手。次に入った部屋は――

「これって……植物園か何か？」

部屋の様子を見たジルが小さく驚く感じで呟いた。部屋の中は、本当に屋内なのかと思ってしまうような様相だ。壁際には雛壇式の植木鉢置き……床にはコンクリートで囲いを造った花壇……中央には小型の噴水まであって、勢い良く水が噴き出している。辺りには雑草が伸び放題で、カナリ長く手入れがされず放置されてきたのが分かる。

「あ、アレって……！？」

ジルが何かを発見した。噴水から噴き出す水に見え隠れする、『仮面』。壁に備え付けられている。そして、彼女が一步前に出ようとしたその時。

「待つんだッ」

私は右腕を伸ばして彼女を制止する。

「……………どうかしたの？」

ジルが怪訝な顔をする。

「噴水の下の方をよく見てみる」

そう言って私が指差した先には――

ウネウネウネ……、ウネウネウネ……

「き、気持ち悪ッ！」

ジルがあからさまに不愉快な面を見せた。我々が目にしているの

は、噴水の水溜りから生えている十数本の――『蔦』。ただし、普通の蔦ではなく、赤ん坊の腕ほどの太さがあって、しきりにウネウネとうごめいているのだ。近づいてくる生き物を分別なく捕食しようとする、凶暴な野生動物みたいな雰囲気を漂わせている。

「気をつける。おそらくはアレもゾンビ共と同じく、何だかの変異を起こした生物に違いない」

「なるほど……なら、どうする？　アレに接近しない限り、壁にあるアイテムはとれそうにないわよ」

ちなみに、噴水の手前には場違いな看板が設置されていて、こう書かれている。

【男性が近づくとエライ事になります・女性が近づくとエロイ事になります】

「……………ジル、とりあえず行ってみろ」

私は少しの沈黙の後、冷静な声で彼女の背中を押した。

「いやいやいやッ、どう考えてもあたしが行ったらダメじゃん。画的に描写がマズイ事になるじゃん」

ジル、必死に手の平を左右に振る。

「いいか、ジル。どのような作品にもある程度の“ガス抜き”が必要だ。物語が長くなれば、どうしてもマンネリ化が始まる。そんな状況を効率的、且つ確実に打破するための要素……つまり、『エロス』だ。回収屋は日頃からこう言っている――“エロが世界に蔓延すれば、世界中から戦争や紛争が消える”――と」

「せいやッ！」

ジル、ウエスカーの背中を思いつ切り両手で突く。

「はうあッ！？」

前のめりにブツ倒れ、噴水の前で土下座するような形で天を仰ぎ見れば、人間の接近に反応した怪奇植物がその異様な触手をウネウネと。そして……

ベシベシッ！　グイグイッ！　ブウウウウ~~~~ン！

触手でビンタされ、首を絞めあげられ、プロペラみたいに振り回されて……

——ドサッ

ジルの前に返却された。

「うううう……とんでもないパワーだ……」

グラサンのずれたウエスカーが床の上でピクピクしている。

「うつわあ~~~~要するに、あたしに犠牲になれと？」

「……………た、頼む」

ブッ倒れたままで親指を立てる。

「さあてと」

バックパックから『除草剤』を取り出して、ドア付近で小さなエンジン音をたてる給水用ポンプにザザアア~~~~と投入。ポンプの中の水が瞬く間に朱色に染まった。

「エロキモイ植物さん、さよ~~~~ならあ~~~~」

クイッ——

ポンプのレバーを操作すると、噴水から噴き出す水も透明から朱色に変わり、やがて……

ウシャウシャ——ウシャウシャ——シャアアアアアアア——

——ッ！

劇薬を浴びた蛇のように全身を激しくくねらせ、数秒後……完全
に動かなくなった。

「よ~~~~し、よし！　これにて安全~~~~」

軽く犠牲となった自分の上司のコトなど気にもとめず、前進する
ジル。だが——

「ツ、きゃあああああああああああ
ああああツツツ!?」

不意に木霊する絶叫。

——ボタンッ!

「ど、どうしたッ!? 何事だッ!?」

館中を震撼させんばかりの絶叫を聞きつけ、目を丸くしたバリーが飛び込んできた。で、そんな彼が最初に目にしたのは……その……あの……いわゆる……

「ちょッ、や、ヤダッ! 離しなさいよオ——ッ!」

長くて太くてビクンビクンと不気味に脈打つ数本の触手に、両手両脚を絡め取られ、M字開脚の状態で空中に吊り上げられたジルの姿。とどのつまり——触手プレイ。

<甘いんじゃボケがあああああああ! 除草剤ごときで、わてのとめどなく湧き上がる劣情をどうにかできると思ってたかあ!?!>
「ひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいッッッ! 植物が喋つてやがるうううううううッッッ!」

ザ・怪奇現象に、バリーも腰を抜かして床の上でM字開脚。

<フヒヒ、久しぶりの上玉やないか>。とことん悦ばせたるでえ
>

ヌラヌラと黒光りする触手がジルの頬をなぞり、服の上から彼女の胸元と下腹部を執拗に攻めてくる。それはもう、イイ感じで。

「やだやだやだッ! あたしはこの手の趣味は無いんだってッ!」
本気でイヤがるジルは既に涙目だ。

「う、うううう……バリー、ケータイを使え……」
倒れていたウエスカーが虫の息で呼びかけてきた。

「えッ、ケータイ? あ、ああ……なるほどッ、警察を呼ぶんだな?」

ジルから渡されたケータイを取り出す。警察は一応オマエ等だけどね。

「ケータイの撮影機能をフル活用し、この惨状を最後まで記録……す、するんだ……ッ」

「……………は？」

バリーの手がピタツと止まる。

「いいか、よく聞くんだ。私にやましい意図は無い（キリッ）……この映像をネットで流し、想定外のクリーチャーに出会った際の対処法を、一般の人々に伝授したいんだ（グラサンがキラ〜ン）」
「い、いや……………通常生活でクリーチャーに出会ったりしないし（汗）」

バリーが珍しく冷静にツツコんだ。

「ちよつとアンタ達ッ、早く助けなさいよオ——————！！」

「ジル……………申し訳ないんだが、少しの間だけ犠牲になってくれ。全ては世界平和実現のため。そういう事だッ！」

何の根拠があつてそんなに力説するのか知らんが、触手プレイの撮影で実現する世界平和はのーさんきゅうだ。

「し、仕方ない……………俺も二人の娘を持つ父親。ここで退いては娘達に“触手プレイはワールドワイドなプレイなのよ！”とか、家に帰つてから怒られそうなんだ。よし、この撮影……………俺に任せてくれッ！」

> i 3 5 2 6 9 — 3 9 6 1 <

そう言つて、捕縛されたジルにケータイのカメラを向けるバリー。その様子はとても静かで荘厳。オヤジよ……………家で娘達が泣いてるよ。＜残念やなあ、姉ちゃん。仲間はアホばかりみたいやし、諦めて体の力を抜きなはれや〜。匠の技うちゅうモンを、その肉体に刻み込んだるでえ〜＞

注意——作者が急な体調不良のため、近所の妖精さんに代筆を依頼しました。結果、下記のような描写になりました。御了承くだ

た。

猫踏んじやった♪ 猫踏んじやった♪ 猫踏んづけちゃったなら、中身出た♪

「待たせたな、リチャード！ どれが血清なのかよく分からんが、多分この中にあるハズだ！」

戻って来たクリスが介抱しているレベツカの前に、大量の薬ビンに混じってガラクタをブチ撒けた。

「ええつと〜……………あ、あつたっス！ コイツで何とかできるっスよ！」

早速、レベツカが応急治療にとりかかる。クリスはその間に近くの部屋を探索し、『楽譜の中間ページ』というアイテムを入手。レベツカとリチャードの様子を見守っている間、ヒマになったんでバナナを食ったり、持ってきたガラクタの中から絵本を取り出して読んだり。

「ふむふむ、“生きてるパンを作った”。“すると、保健所の人が出来て来て、連行されちゃった”。“包装もされていないパンが、空を飛んだり近所でダレかと戦ったりするのは、衛生上大変良くないから”……………なるほど」

「クリス先輩、何を読んでるっスか？」

「アン。ンマン」

民事訴訟の対象になりそうなヒーローだな。

「よし、一通りの処置は済んだっス。リチャード先輩、しばらくここで休んでいるっスよ」

「ああ、すまない……………後はオマエ達に任せて、一休みさせてもらうっス。そう言っつて、リチャードは壁にもたれ掛り目を閉じた。

「あ、そうだ。レベツカ、他のメンバーはどうした？ この館の中にいるのか？」

「それが……………気持ちの悪いバケモノ達に襲撃されて、バラバラになっつてしまっつたっス。自分は無線機を持つてなくて……………」

「そうか……………新入りの身で大変だったな。だが、もう安心だ。一階

にはウエスカーとジルもいるし、手負い（精神的に）ではあるが、バリーもいる。さあ、コイツを食ってエネルギーの補給だッ」

えらく能天気な笑顔でバナナを差し出してくるクリス。

「いや、いらないうス」

即答。

クリスとレベッカはウエスカーとジルのペアと合流するため、一階へと向かうが、探しているうちに初めての部屋へ。

「ここは……バーかな？」

潇洒な造りのバーカウンターがあつて、部屋の中央にはピカピカに磨かれたグランドピアノが。

「よし。ゾンビ共のいる気配は無いし、飲もうぜ！」

「……………マジっスか？」

カウンターの棚に並んだ沢山の酒ビンを見つめ、クリスがアゴに手をあててニヤついている。

「おおッ、ロマネ・コンティがあるぜッ！ こりゃ飲むしかないなッ！」

クリスはすっかりキャバクラの客みたいになつてる。

「珍しいワインなんスか？」

「少し前にウエスカーと銀座で飲んだんだが、その時おごつてもらつてよ。メチャクチャ美味くて、メツチャ高かったんだよ」

クリス、一応言っておくがここはアメリカだ。

「えッ、いくらしたんスか？」

「ん？ 確か……………40万近くしたかなあ？」

「ま、まままままッ、マジっスかッ！？」

レベッカの目の色が変わる。

「なんでも、フランスの特定の地域で採れたブドウのみを使って造るヤツで、数も少なくいから高いんだとさ。オークションとかで当たり年のヤツが、260万なんて値段で競り落とされた事もあるらしいぜ」

「に、ににににッ、ニヒャククロクジュウま——ん！？」

何が彼女をそんなに興奮させるのか……瞳の中に　を浮かべながら、レベツカが軽く鼻血を吹いた。

「お、おい……大丈夫か？」

後輩のただならぬテンションに、クリスがたじろぐ。

「保護するっス！　この部屋にある全ての酒をラクーン市警の名のもとに、ことごとく保護するっス！」

レベツカの鼻息が荒い。

「いや、酒を保護って……それより、仲間の搜索を続けねえと」

「——え？　あ……ああ、そうっスね。危うく失念するところでした……アハハハ（汗）」

で、クリスはロマネ・コンティを近くにあったグラスに注ぎつつ、部屋の様子を見渡してみる。

（……ん？　ピアノか……そういえば『楽譜の中間ページ』ってヤツを見つけてたな。と、なると）

いつもは決して使わないザ・脳みそをフル活用し、部屋の隅で『楽譜』を発見する。

「よし、完成だ。流れるには、この楽譜を使ってピアノを弾くべきシチュエーションなんだが……」

クリスにピアノは弾けない。って言うか、弾けたら画的に気持ち悪い。

「どうしたっスか？　もしかして、ピアノが弾きたいんスか？」

「ああ。ウエスカーもこの館内で見つけたアイテムで、次々と仕掛けを解いていたからな……おそらく、この楽譜を使えば何か起きるんじゃないかと思うんだ」

クリス、バナナを同時に二本食いしてる。やたらと脳内で糖分を使用しているらしい。

「それなら自分に任せるっス。得意ではないっスけど、一応は一通り弾けるっス」

レベツカは少々自慢げに胸を張って椅子に座り、鍵盤にソツと手をそえる。そして――

—— 科学の限界をく超えて♪ 私はく来たんだよ♪ ナ
イフはついてないけど、出来ればほしいな♪ あのねはくやくく、
洋館に入れくてよ♪ どうしたの？ 試験管ずつと見つめくてる
く 君のこと バイオバイオにしてあげるく 救助はまだね、
頑張るから♪ バイオバイオにしてあげるく だからちよつと
く覚悟をしててよねく バイオバイオにしてやんよく 最後
までね、頑張るから♪ バイオバイオにしてやんよく だから
ちよつとく自爆してあげてく バイオバイオにしてあげるく
世界中の誰、誰より♪ バイオバイオにしてあげるく だか
らもつとく私に戦わせてねく ——

とりあえず、無難に弾いてみた。

「……………何の曲だ？」

「さあ…………知らないっスね」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴオオオオオ

——！

ピアノを弾き終わると同時に部屋の壁が一箇所、シャッターのよ
うに迫り上がって、一本の廊下が彼等の前に出現した。

「よし、レベッカはここで待て。オレが行って調べてみる」

「了解っス」

クリスがベレッタを構えて慎重に中へと進むと、その廊下の突き
当たりに、石の台座に立つブロンズの像があった。そして、石の台
座には黄金に輝く『ゴールドエンブレム』がはめこまれている。

「こいつはスゲえ…………全部金で出来てるのか？」

ズシリと重いゴールドエンブレムを手に取り、クリスが軽く溜息

をもらす。

「——金ッ!? マジっスか!?!」

クリスの声に反応したレベッカが、またしても目の色を変えて廊下へと駆け寄って来た。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴオオオオオ

——ズン……

「……………あ」

隠し扉が自動で下りてきて閉まった。中にクリスとレベッカがいるのに。

「し、しくじったっすうううううう!!」

灯火に群がる害虫みたいに、ゴールドエンブレムへ吸い寄せられた結果……閉じ込められた。

(だ、ダメっス……開閉のためのレバーもスイッチも見当たらないっス!)

見事なまでにトラップに引っかかっている。最悪だ……二人して閉じ込められては、無線機を持っていない現状、助けを呼ぶこともできない。

「いやっすうううう——ッ! こんな所で、進化に失敗したゴリラと一緒に果てるなんてえええええ——ッ!」

レベッカ、両手で頭を抱えて悶えちやう。

「ふゝゝむ、コイツをはめ込めばいいんじゃないか?」

ガコッ……

クリスが一階の大食堂で手に入れていた『木製のエンブレム』を使った。すると……

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴオオオオオ——

——!

隠し扉、開く。

「よ、よよよよッ、よかったッうゝゝゝ（泣）！」

レベッカ、ゴールドエンブレムに頼ずりしながら尻もちついてる。
「ふうゝ、なんかよかったな。レベッカ、今度こそウェスカー達と合流するぞ」

「わ、分かったッス。あ、先輩……………」

「どうした？」

「恥ずかしながら…………アハハハ、こ、腰が抜けちゃったみたいで…
…先に玄関ホールへ行って待ってて欲しいッス」

「なんだよゝゝ、情けねえなあ。しっかりしてくれよ」

クリスはそう言って苦笑いしながら先に部屋を出て行った。そして、残ったレベッカはすぐに立ち上がると、ついさっき“持っていない”と言っていた無線機を取り出し、電源を入れた。

「……………こちら、レベッカ。クリス先輩と合流し、現在、一緒に行動してるッス」

<よし、ヤツは他人を疑うという事を知らん朴念仁だ。上手く手綱をひいて操作してやれ>

「了解ッス。ところで…………“特別ボーナス”の件、忘れないでくださいッスよ」

<心配ない。この作戦が首尾良く終了すれば、片手ではつかみきれない札束で引っぱたいてやる>

「クフフフッ、楽しみにしてるッスよ…………“ウェスカー隊長”」
レベッカの口元が不吉に歪んだ。

ただし、バリーは尻から出る

「……………おい、何が起きたんだよ？」

『ゴルドエンブレム』を手に入れ、ウエスカー達と合流するた
め立ち寄った大食堂にて、クリスが呆けた顔で立ち尽くしている。
彼の目の前には、御手製の十字架に磔にされたバリーと、スマキに
されて天井から荒縄で吊るされたウエスカーの姿が。

「この男共はあたしを辱めた罰により、猛省してもらってところ
よ（怒）」

テーブルの上の燭台に淡い火を灯し、ジルが“ダレだよアンタ！
？”って言いたくなるくらい悪人面で椅子に座ってる。

「く、クリス……助けてくれ……………俺はただ、ちょっとその場の
空気にのまれちゃっただけなんだ」

救いを求めるバリー。額には『父親失格』とサインペンで落書き
されてるし。

「く、クリス……どうにかジルをなだめてくれ……………後でオマエ
にもいい物を観せてやるから」

取り引きを持ちかけてくるウエスカー。股間に『制御不能』って
書かれた紙が張られちゃってるし。

「勝手に喋るなッ！ さあ、早く白状しなさい……………あたしのケータ
イをドコに隠したのッ！？」

前回の触手プレイで露わにしてしまったジルの痴態。その光景を
撮影したケータイを、ジルに追いかけられる最中、二人の男共はド
コかに素早く隠したようなのだが、現在……………ジル審問官がその場所
を問いただしているようだ。

「そ、それは言えないッ……………あの動画をニコニコ動画にアップする
まで、私は黙秘権を行使させてもら……………」つぎやああああああ
あああああああああッッッ！！」

あくまで抵抗するウエスカーに対し、ジルは燭台の火を彼の頭に

近づけて拷問。

「ふう………なんかよく分かんねえけど、じゃあオレは任務を続けるぜ」

空気についていけそうにないと判断したクリスは、暖炉の上のエンブレム（木製）がはまっていた所に、ゴールドエンブレムをはめた。すると――

――ガコンッ！

何かの装置が作動するような金属的な音がし、壁際の柱時計の蓋が開いていた。

「おおッ、やっぱり仕掛けがあつたみてえだな」
得意そうな顔してクリスが柱時計に近づく。

クルッポお~~~~~！ クルッポお~~~~~！

いきなり飛び出してくるハトのギミック。ベストのタイミングでクリスの眉間に直撃。微妙に血が出た。

「ふ、フザケンなよ………ん、コイツは！？」

ハトのギミックが金属の物体をくわえていた。それは――『盾のカギ』。剣と鎧に続き、また新しいカギが手に入った。

「よ~~~~し、コイツでどこかのドアが開くってワケだな。バリー、一緒に行こうぜッ！」

“磯野、野球やろうぜッ”――みたいなノリで声をかけてみるが、礫にされたままの二児の父親は、すっかりうなだれたままでヤル気無し。

「仕方ないわねえ………ま、バリーはカナリ反省してるようだから、解放してあげるわ。感謝しなさいよッ！」

「スマン………今回の件はうちの家族には内密に頼む」

「はいはい、分かったからしっかり働いてきなさいね」

で、解放される被疑者・バリー。こうして二人は二階へと移動し、まだ休憩中のリチャードにバリーがしんみりとした顔で挨拶し、一

つのドアの前に立った。

「おッ、レベッカ。オマエも来てたのか」

ドアの前には、まるでここに来る事を予測していたかのように、レベッカが両手を腰にあてて待機していた。

「このドアが何か怪しいッス。先輩、カギは持ってるッスか？」

「ああ、任せろ。よし……二人とも、中にはどんなバケモンが待ち受けているか分からない。油断するなよッ」

「了解ッス！」

「妻よ、娘達よ、俺は一時の邪念を洗い流し、真人間として家に帰るからな！」

心の準備も完了。

カチャ――

解錠され、ドアを開く。

<やあ、ボクの名前は『ヨーン』！ 見た目通りの気さくな爬虫類さッ！>

――バタンッ

閉める。

「……………おい、レベッカ……………今、ナニがいなかった

……………か？」

「い、いたッスね……………」

ドサッ！

クリスとレベッカが顔を見合せながら引きつる傍で、バリーが一言も絶叫することなく崩れ落ちて気絶した。人間、ビックリする限界が越えると、無言で頭のサーバーがダウンするらしい。

「よ、よ……し……………もう一度開ける……………ぞッ」

「わ、分かった……………ッス」

ガチャ――

<やあ、ボクの名前は『ヨーン』！ 文字通り首を長〜くして待っていたよッ！>

——ボタンッ

再度、閉める。

「いやいやいやいやッ！ アレはあり得ねえって！ ヘビか！
？ マジでヘビなのかあ！？」

「で、でででででッ、デカ過ぎるっス！ カバも丸呑みにでき
そうなくらいの大きさだったっス！」

『ヨーン』——10メートル程の巨体に猛毒を合わせ持つ大蛇。

胸部の直径が全長に対しアンバランスなほどに太く、体表には鱗ではなくカエルのような皮膚をもつ。元は実験体であったが逃げ出した後にウィルスの影響から巨大化しており、洋館内の通気管などを移動している。毒は強力で噛まれれば人間でも数分で死に至り、その効果は血清でしか消すことができない。

「レベッカ、オマエはベレッタで後方から援護してくれ。オレはシ
ョットガンで突っ込む」

「無茶っス！ あんな規格外なモンスターに銃弾が効くかどうか……
……！」

「無茶は承知！ だがな、この中にケガをして動けない仲間が居る
かもしれん。見過ごすワケにはいかないんだよ！」

「せ、先輩ッ……カッコ良いっス そこはかとなくカッコ良いっ
ス」

レベッカ、思わず頬を桃色に染めちゃう。

「よ〜し、いくぜッ！ ……………っと、その前にだな」
ズリズリズリ……

気絶したままのバリーを引きずるクリス。

「レベッカ、オレが合図したらドアを素早く開けるんだ。いいな？」
「……………あ、あの〜、先輩？ 何をヤル気っスか？」

レベッカがものすごくイヤな汗を噴きながら質問してみる。

「何って……速攻でバリーを投げ込むんだよ。で、大蛇がバリー（エサ）に食らいついてる間に、オレ達で部屋の中の搜索を行うんだよ」

クリス、屈託の無い表情がとっても怖い。

「前言撤回っス……先輩、死んだら確実に地獄へ落ちるっスよ」

レベッカが絶対零度の視線を送りながら小声で呟く。

「甘いことを言うんじゃない！ 野生の世界では当然の行為だ！」

コイツ、そろそろ人類やめそうだ。

「じゃ、じゃあ……開けるっスよ」

「よっ……と。よし、今だッ！」

ガチャ――

三度目のオープン。そして……

――ポイツチヨ

犯罪に巻き込まれた人が海へと捨てられるみたいに、バリーが部屋の中へと投げ込まれた。

「よしッ、行くぞッ！ 突入だアアアアアアアアアアアア！」

ショットガンを構えた状態で駆け出すクリス。

「やあ、いらっしやいお客さん。ボクの巣にようこそ。アレレレ」

「？ このオジサン……どうかしたのかな？」

床の上で失神したままのバリーに気づき、大蛇が近寄って来た。

（やったっス！ 罪悪感で気がひけるっスけど、作戦成功した様子っス！）

レベッカはなるべく足音をたてないように、泥棒みたいに身を低くして爪先立ちで移動する。

「くそッ、仲間の姿は無いか………お、コイツは？」

物置のようなこの部屋の隅で、明らかに目立っている物体を発見する。それは『鼻が封じられた仮面』だった。

「よしッ、これでこの場所には用は無いな。レベッカ、早くバリー

を引きずって――」

と、仮面を拾ったクリスが振り向けば……

くも……グモグ、も……グモグ、人間はやっぱりこの喉ごしがたま
んないよねえ……」

「ふぎやあああああああああああッッッ!? 暗いぞッ、
臭いぞッ、生温かいぞオオオオオオオオ――!!」

目を覚ましたバリーが、大蛇に丸呑みにされている真つ最中だっ
た。ヨーンの口から飛び出した彼の両脚が、先程から必死にバタつ
いている。

「この野郎ッ、バリーを食うんじゃねえッ! 吐き出しやがれええ
ええええええええッ!」

ズドオオオオオオオオン! ズドオオオオオオオオオン! ズドオ
オオオオオオオン!

> i 3 5 6 0 4 — 3 9 6 1 <

クリスがショットガンを連射する。的が大きいのでクリーンヒッ
トしているが、大蛇はほとんど意に介することなく食事を続行。

――ペロリッ ――ゴクッ

「……………あ」

クリスとレベッカが同時に間抜けな声を漏らす。

<ごちそうさまでしたア……! ……………げえっぷ>

バリー、殉職。

「このクソ爬虫類がああああ! よくもオレの仲間をおおおお
」

激昂するクリス。バリーをエサに使った事実など無かったコトに
して。

ザクザクザクッ！

<い、痛いッ！ 痛いよオ〜〜！ ボクの敏感肌を刃物で刺さないでよ〜〜！>

銃弾では効果が薄かったため、今度はコンバットナイフで大蛇の腹を何度も突く。すると――

ゴポンッ……ゴボゴボッ……

刺激された腹が急にうねりだし、水っぽい生々しい音がクリスの耳に聞こえてきた。

<は、はうううう――ん（苦）！>

ブシャアアアアアアアアアアアアアアアア――ツッ

ッ！！

苦悶する大蛇のシッポの方から大量に吹き出される……………物体。

様々な汚物にまみれ、尋常じゃない悪臭を纏っちゃったバリーが排泄された。要するに……………下痢だ。

「う、うううう……………た、助けて……………ク、クリ――」

「――よし、撤収ッ！」

「了解ッス！」

ザッザッザッザッ……

踵を返して部屋を後にする仲間二名。残されたバリーにヨーンが顔を近づけてきた。

<なんか大変だね、オジチャン。ボクでよければ話を――つて、臭ッ！！>

シュルシュルシュル……

穴のあいた通気管から逃げていく大蛇。結局、一人ぼっちになってしまった未消化物^{バリ}は、ゆっくりと立ち上がり、バックパックから一枚のゴミ袋を取り出す。そして、自ら袋の中に入った。

「ダレか……………俺を出してくれ」

ポツリと言呟いた。

「お〜い、ついにこの気味の悪い仮面が四つ全てそろった――

――ぞッ!？」

報告のため、レベツカと共に大食堂へ戻ったクリス。彼の目の前には、一体、ドコから持ち出してきたか不明な三角木馬……そしてその上には腕を後ろ手に縛られたウエスカーがまたがってる。

「まったく、本当にしぶといわねッ……さあ、言っのよッ! あたしのケータイをドコに隠したワケ!？」

「んんん――ッッ!！ んッんッんッ……ん――ッッ!！
ん~~~~ん~~~~」

鬼のごとき尋問を繰り返すジルに対し、ボールギャグを咥えさせられたウエスカーは、苦悶したり微妙にナニか感じちゃったりで忙しい。

「あのよオ……エスカレートしちまってるよと申し訳ないんだが、使えそうなアイテムがそろったからさあ、墓地の地下に行こうと思うんだが」

「はいはい、勝手にどうぞ。あたしはこのクソヤロウを更生させなきゃならないから」

そう言って、乗馬用のムチで自分の上司をシバくのに夢中。更生する前に、別の何かが開発されそうな勢いだが。

「クリス先輩、コレって……………」

「何も言っな。そして、見るな。大人には色んなしがらみや事情がある……そんなカンジだ」

この光景を指差すレベツカを制し、クリスは静かにドアを閉めてこれ以上は関わらないことにした。

「よし、仮面をはめていくぞ」

クリスはレベツカを連れ、墓地の地下にある不穏な空間に再び訪

れ、壁に四つの仮面をそれぞれはめていった。すると――

――ドスンッ！

「なッ、何だッ!？」

何か重たいモノが落下してくるような音が背後からして、クリスが振り向いてみると、そこには天井から落ちてきたと思われる金属製の棺桶が一つ。

> i 3 5 7 6 8 ― 3 9 6 1 <

（おいおい……イヤな予感しかしねえよ）

クリスはベレッタを構え、恐る恐るその棺桶に近づいてみる。落下した衝撃で棺桶は既に蓋が開いており、中に一体の死体が眠っているのが見えた。その時――

ガラガラガラッ――！

「えッ、ちょ……どうなってるっスか!？」

この地下空間の唯一の出入り口に突然鉄格子が下りてきて、地上と地下をつなぐ階段で待機していたレベッカがたじろいだ。

「レベッカ、平気かッ!？」

地下空間に一人残されてしまったクリスが後輩に呼びかける。

「こっちは問題ないっスけど、先輩……どうするっス?」

「さあて、どうすっかなあ……」

この流れ……完全に棺桶の中を調べないと先に進む展開が望めないフラグだ。

（よし、ここは――先手必勝ッ!）

棺桶の半ばミイラ化しかけている死体に、ベレッタの照準を合わせる。

< ひゃっはアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ツツツ!!-->

死体はハイテンションな叫び声と共に跳ね起き、クリスのベレッタを蹴りとばした。

「う、うおッ！ 何だよ、コイツは！？」

今までのゾンビ達も十分に元気だったが、コイツは輪をかけてみなぎってやがる。

くわては『クリムゾン・ヘッド・プロト1』やッ！ 兄ちゃん、開封してくれてありがとうなあ~~~~！>

口から霧状の白い息を吐きながら、ソイツは背中をネコ科の野生動物みたいに曲げ、超攻撃的な空気をかもし出している。

『クリムゾン・ヘッド・プロト1』——人為的に造られたプロトタイプのクリムゾン・ヘッド。あまりの凶暴性の高さに危険視され、墓地の地下室に閉じ込められていた。通常のクリムゾン・ヘッドに比べ、体力と攻撃力が高い。

「くそッ……！」

銃を拾っているヒマは無い。相手はその剣呑な両手の長い爪を振りかざし、ものすごい勢いで突っ込んでくる。クリスは素早くコンバットナイフを鞘から抜き、迎撃体勢をとる。鉄格子にはばまれてレベツカからの援護は期待できそうにない。まさに、一騎討ちの始まりだ。

<人間の動体視力じゃわての動きはとらえられへんでえ~~~~！>

ヒュン、ヒュン、ヒュン——

とてもゾンビとは思えないダイナミックで素早い身のこなし。クリスをあざけるかのように、彼の周囲を回りながら爪でチクチクと浅く攻撃してくる。

（マズイ……どうしても反応が遅れちゃうッ！）

近接戦闘においては銃よりナイフの方が有利。だが、クリスの反応速度ですら、この敵には追いつけていない。こうなったら最後の手段……

「ミラクル・ゴリラパワー、限定解除オオオオオオオ——！」

（これは想定外っス……！）

焦るレベツカは通信機を取り出し、コールしてみる。が、通信相手……ウェスカーの応答は無い。どうやら、未だにジルの羞恥拷問を受けているようだ。

「むう……、使えない上司っス！　こうなったら………ヤルしかないっスね！」

ガラガラガラツ――

鉄格子が上がる。

「なんや、えらくキュートな小娘やないか。けどなあ、わての殺害欲求は小娘相手でも容赦せえへんのやでえ……！」

接近するクリムゾンに対し、レベツカはベレッタを構える。

（敵のフットワークはカナリ軽い……自分の射撃技術では難しいっス……！）

どうしても彼女の視界に倒れたクリスの姿が映る。次の瞬間には我が身もあなるのだという思いが宿ってしまつて。

「自分、ここで死ぬワケにはいかないっス！　死ぬ時は豪邸の札風呂の中でって決めているっス！」

――ダツシュツ！！

レベツカ、口から願望を漏らしつつ回れ右。ザ・逃走――

＜逃がすかい、このボケがあああああ――！＞

10本の凶器が薄闇の中でドス黒く輝き、次なる獲物を狩るべく振り上げられ――

グイッ……

＜――ッ！？　な、なんやてッ！？＞

クリムゾンの足首を力強くつかむ手。その手の持ち主はもう片方の手にバナナを1本握りしめ、口で皮を剥き始めた。

「せ、先輩ッ！」

レベツカが喜びと不安の混じった声を上げる。

「ついに……ついに、コイツを口にする時がきたぜッ」

モシャモシャ……モシャモシャ……

食ってる。首から大量に出血しながらも、美味そうにバナナを食っている。

<タフなヤツやのう。まあ、ええわ。すぐにトドメさしたるでッ！>
ヒュン――

クリムゾンがまたしても野生動物のような俊敏な動きで間合いをつめ、クリスの死角から鋭利な爪を――

「あゝゝんぱんちイイイイイ――！！」

<ひでぶウウウウウウゝゝ！！>

荒唐無稽なクリスの裏拳を食らって、クリムゾンの顔面が潰れた。
<うつつ………な、なんでや！？どこにそれほどのパワーを！

?>

フラフラしながらクリムゾンがクリスを指差す。

「テメーはオレに究極のバナナの摂取を許可しちゃったのさ。この、完全無農薬・有機栽培・日本産の完熟バナナ……その名も『岩崎さん』！コイツを食ってオレのゴリラパワーは真に解放されるのさッ！」

クリス、この上無いドヤ顔。

「よく分からないっすけど、岩崎さんすごオオオオオい」

ドーピングバナナの効果に感心するレベル力に見守られ、最終ラウンドが始まる。

押してダメだったから引いたら………ダメだった

<ひ、ひでぶウウウウウウウウウウウウウウウウ！！！>

日本国土が生んだ特級バナナ『岩崎さん』。それを摂取したクリスの前に、早速、クリムゾンが倒れ伏すしかなかった。どのような攻撃が繰り出され、いかなる死闘が展開されたのか………あえて省略
「よし、コイツはいただくぜ」

クリスはクリムゾンが入っていた棺桶の中に、『鉄と石製のオブジェ』を発見する。

<な、なんでや……最強のゾンビであるわてがどうしてこんな……こんなぞんざいな扱いを……？>

瀕死のクリムゾンが片手をプルプルと震わせながら伸ばし、クリスに回答を求めた。

「すまん。作者がゾンビとの戦闘描写に飽きた。ただそれだけだ………」

クリス、クリムゾンの顔が見れなくて。ああ、見れなくて。

<な、なるほど……夏場、訪ねてきたセールスマンをパンツ一枚で出迎えたヤツ（実話）には逆らえん……そういうこつちやな？>

ガクッ――

クリムゾン、果てる。

「か、勝った……先輩ッ、勝ったっスねええええええええッ！」
極度の緊張で顔を強張らせていたレベツカが、歓喜の笑みを浮かべながら駆け寄って来た。

「おおッ、当然だ！ けどな、オレ、血が……その、沢山無くなっちゃって……あ……」

ドサッ――

クリス、大量失血により気絶。

――十数分後――

「お、重かった……スううううう……」

大食堂に帰還したレベツカは、片手に気絶したクリスを。もう片方には、ゴミ袋に包まれて小声でブツブツ呟いてるバリーをつかんでいる。どうやら、ここまで引きずって運んできたようだ。で、大食堂内にて続行中のコアな拷問の方は。

「本当に呆れるわッ！ これだけ責めても口を割らないなんて……頭オカシインじゃないのッ!？」

ビリビリビリッ、ビリビリビリッ！

「うッ、くッ、ぬおおおおお——！ まだまだ、私は耐えてみせるぞッ！」

ビリビリビリッ、ビリビリビリッ！

上半身裸になったウェスカーが椅子に固定され、ネバーでギブアップしている。

> i 3 5 8 2 0 — 3 9 6 1 <

「ウェスカー隊長！ 両乳首に電極はさんで悶えてる場合じゃないっスよ！」

一応ツツコンではみるが、あまり建設的な協力は求められそうにない。

「ちょ、ちょっと！ どうしたのよ、クリス!？」

首筋からの出血が未だに止まらないクリスに気づいたジルが、慌てて駆け寄ってくる。

「手強いゾンビにやられたっス。そのゾンビは撃退できたっスけど、先輩は爪で首を刺されて……」

自責の念にかられているかのように、レベツカは俯き加減で呟いた。

「了解したわ。この食堂内はとりあえず安全だから、ここで応急処置を施すとしましよう……安心して、あたしのコスメポーチに道具

はそろっているから」

ジル、真剣に同僚の心配をするのはいいが、乳首を電流でイジメられてるオッサンが背景にいるのを忘れないで。

「それじゃあ、ジル先輩……後を頼むっス。自分はコレ……じゃなく、バリー先輩の残骸みたいなのを連れて搜索を続行するっス」

レベッカ、フレッシユな感じでビシッと敬礼し、踵を返す。

「コロシテクレ、コロシテクレ、コロシテクレ………」

バリー、大蛇の排泄物と化した上、仲間からあっさり見捨てられたのがカナリの後遺症となったようで、体を丸めてブツブツと呪文を唱えちゃってる。

「さあ、行くっスよ、バリー先輩！ ついに新しいエリアへ踏み込むっス！」

「ヤダヤダヤダヤダヤダヤダッ！ お外は怖い……！ お化けとか絶対出るって！」

レベッカとバリーのペアは、今までに入手したアイテムを駆使してついに外へ。と言っても、館の領地から出れたワケではなく、広大なスペースの中庭に進めただけ。辺りには不気味なモヤが薄らと漂っていて、遠くの方から獣の遠吠えみたいなのが聞こえてくる。舗装はされていないが、一応、道らしき物が続いている、二人はしっかりと周囲の雑木林を警戒しつつ歩を進めていく。

<ぐわあ……、ぐわあ……、ニンゲンガキタぐわあ……！>

朽ちかけた鉄柵にとまっている数匹のカラスが、急に人語をしゃべりだす。

「ひゃッ！？ カ、カラスが………バリー先輩ッ、今の聞いたっスか！？」

ウィルスに感染した人間の死肉を食べたカラスが変異したものだろつが、普通に人の言葉を発せられて、レベッカは驚きながら仲間

「それでは皆さん、サヨウナラ」

「せ、先輩！？ ダメっス！ 恐怖に屈して脊髄反射で自殺しようとしてるっス！」

「……ッ、あ？ レベツカ？ お、俺……今、何を……」

（ヤバイっス……自分、とんでもない荷物をしよいこんでしまった
気がするっス）

「コイツは完全にフラグっスね。中に入る↓中の様子を観察する↓
敵が物々しく登場↓ダレか死ぬ」

「あの世の皆さん、コンニチハ」

「……どうせ死ぬなら仲間の役に立ってから死ぬっすよ！」

小屋のドアを開け、中へと放り込まれるバリ。その光景は……

「ホトシホトシホトシホトシホトシホトシホトシホトシ」

「……！」

言う事きかない悪ガキが、お母さんに押し入れへ閉じ込められた……そんなヤツの38歳バージョン。ドアの外側で、体を押し当てて逃げ出さないようにするレベツカと、必死にドアを叩いて懇願するオッサン。正直……見るに堪えない。

ヒタヒタヒタ……………

「……………ひッ!？」

背後から素足で地面を歩くような音がして、バリーは小さく悲鳴を上げながら振り向いた。そこには……

< あんれまあ、どちら様だっぺか!？>

「ぎゃあああああああああああああああああッッッ……！」

カッと両目を見開いて絶叫するバリー。人の形をした“何か”がそこに立っていたのだ。

< ど、どうかしたか!？ あたしゃあ、この小屋に住んどるモンだけでも、ちゃんとしたお客様は久しぶりだっぺ。歓迎するずらよ>

話し口調は妙に穏やかではあるが、残念なことにその外見は、バリーの心臓を今にも破裂させかねない攻撃力を有していた。

「だ、だだだだだだッ、ダレですかあああああッッッ!？」
< あたしゃあ、『リサ・トレヴァー』っちゅうモンだよ>

『リサ・トレヴァー』——現在の舞台となっているこの洋館を設計した『ジョージ・トレヴァー』の娘が、始祖ウィルスを投与されたなれの果て。30年もの長期に渡ってウィルスの実験を受けており、凄まじい生命力を持つ。既に死んだ母親を求めて館の領地内を彷徨っている。頑丈な手枷をつけられ、ボロ布でつぎはぎしたような粗末な服を身に纏い、頭から麻袋のような物を被っている。

「俺、バリー、38歳! 職業は一級フラグ建築士! コワイのヤダ! お家に帰してええええええ——(泣)——」

バリーのもつても危険な異文化交流が始まった。もちろん、下半身はビッチョビッチョにして……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7298x/>

たった今、現代医学が敗北しました

2011年11月26日15時48分発行